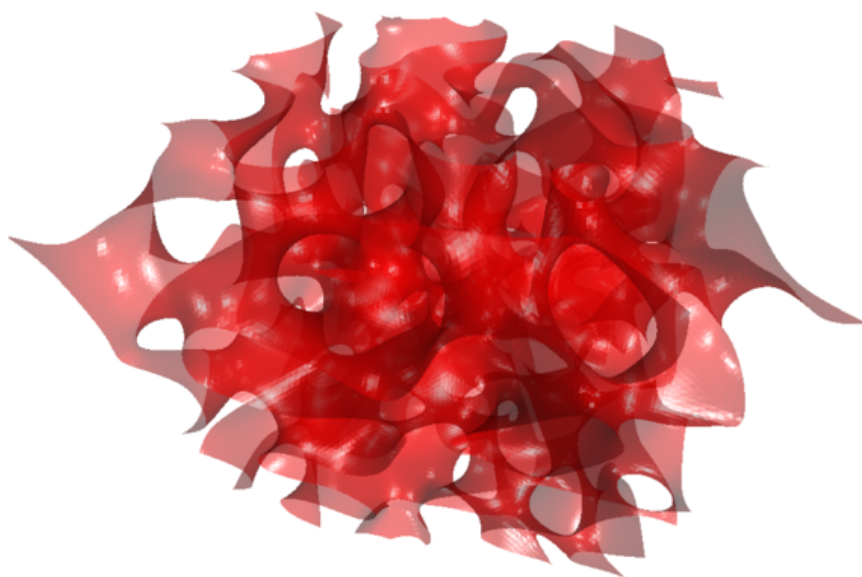


# GLSC3D (Ver. 3.0.0)

## Manual

構想・制作・監督：秋山 正和  
北海道大学電子科学研究所



制作：平芳 悠人，岡本 守  
北海道大学理学部数学科

2017 年 4 月 6 日



# 目次

<b>1</b>	<b>はじめに</b>	<b>8</b>
1.1	GLSC とその歴史	8
1.2	GLSC の長所・短所	8
1.3	GLSC3D の開発まで	12
1.3.1	X Window System の限界	12
1.3.2	OpenGL と GLUT の使用	12
1.3.3	GLSC らしさと OpenGL らしさ	13
1.3.4	GLSC3D の赤ちゃんの誕生	14
1.4	GLSC3D の開発	14
1.5	GLSC3D の設計哲学	15
<b>2</b>	<b>GLSC および GLSC3D Ver2.x からの変更点及び注意点</b>	<b>17</b>
2.1	GLSC からの変更点	17
2.1.1	Fortran 言語をサポートしていない	17
2.1.2	最終の描画スタイルの変更	17
2.2	GLSC3D Ver2.x からの変更点	19
2.2.1	OpenGL の最新規格への追従	19
2.2.2	ウインドウライブラリを FreeGLUT から SDL への変更	19
2.2.3	2D の描画順の変更	19
2.2.4	フォント埋め込みの廃止, フォント指定関数の変更, 日本語などの Unicode 文字への対応	19
2.2.5	ウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display の対応	20
2.2.6	マーカーの種類の追加	20
2.2.7	その他	21
2.3	GLSC3D の注意点	22
2.3.1	物体の透明化における注意点 (Ver1.x をお使いの方へ)	22
2.3.2	物体の透明化における注意点 (Ver1.x 以降 をお使いの方へ)	23
<b>3</b>	<b>動作環境とその構築</b>	<b>25</b>
3.1	動作環境	25
3.2	動作環境の構築	25
3.2.1	Mac OS X の場合	25
3.2.2	Linux の場合	25
3.2.3	Windows の場合	26
<b>4</b>	<b>GLSC3D のインストールとテスト</b>	<b>27</b>

5	GLSC3D の関数	29
5.1	制御関数	32
5.1.1	g_init	32
5.1.2	g_init_core	33
5.1.3	g_init_light	35
5.1.4	g_init_light_core	35
5.1.5	g_disable_light	35
5.1.6	g_scr_color	36
5.1.7	g_cls	36
5.1.8	g_finish	37
5.1.9	g_sleep	37
5.1.10	g_capture_set, g_capture	38
5.1.11	g_enable_highdpi	38
5.2	補助関数	39
5.2.1	g_key_state, g_input_state	39
5.3	スケール関数	41
5.3.1	g_def_scale_2D	41
5.3.2	g_def_scale_3D	42
5.3.3	g_def_scale_3D_core	44
5.3.4	g_sel_scale_2D, g_sel_scale_3D	45
5.4	属性コントロール関数	46
5.4.1	g_marker_color	46
5.4.2	g_marker_size	46
5.4.3	g_marker_radius	46
5.4.4	g_marker_type	47
5.4.5	g_def_marker	48
5.4.6	g_sel_marker	48
5.4.7	g_line_color	50
5.4.8	g_line_width	50
5.4.9	g_line_type	50
5.4.10	g_def_line	51
5.4.11	g_sel_line	52
5.4.12	g_area_color_2D, g_area_color_3D	53
5.4.13	g_def_area_2D, g_def_area_3D	54
5.4.14	g_sel_area_2D, g_sel_area_3D	54
5.4.15	g_text_color	55
5.4.16	g_text_font_core	55
5.4.17	g_text_size	55

5.4.18	<code>g_def_text, g_def_text_core, g_sel_text</code>	56
5.5	描画関数	57
5.5.1	<code>g_marker_2D, g_marker_3D</code>	57
5.5.2	<code>g_text_standard</code>	58
5.5.3	<code>g_text_virtual_2D, g_text_virtual_3D</code>	58
5.5.4	<code>g_move_2D, g_move_3D</code>	59
5.5.5	<code>g_plot_2D, g_plot_3D</code>	59
5.5.6	<code>g_box_2D</code>	60
5.5.7	<code>g_box_3D</code>	60
5.5.8	<code>g_box_3D_core</code>	61
5.5.9	<code>g_sphere_3D</code>	63
5.5.10	<code>g_sphere_3D_core</code>	64
5.5.11	<code>g_ellipse_3D</code>	65
5.5.12	<code>g_ellipse_3D_core</code>	66
5.5.13	<code>g_prism_3D</code>	68
5.5.14	<code>g_prism_3D_core</code>	69
5.5.15	<code>g_cylinder_3D</code>	71
5.5.16	<code>g_cylinder_3D_core</code>	72
5.5.17	<code>g_cone_3D</code>	74
5.5.18	<code>g_cone_3D_core</code>	76
5.5.19	<code>g_pyramid_3D</code>	78
5.5.20	<code>g_pyramid_3D_core</code>	79
5.5.21	<code>g_arrow_2D</code>	81
5.5.22	<code>g_arrow_3D</code>	82
5.5.23	<code>g_arrow_3D_core</code>	83
5.5.24	<code>g_triangle_2D</code>	85
5.5.25	<code>g_triangle_3D</code>	86
5.5.26	<code>g_triangle_3D_core</code>	87
5.5.27	<code>g_fan_2D</code>	88
5.5.28	<code>g_fan_3D</code>	89
5.5.29	<code>g_fan_3D_core</code>	90
5.5.30	<code>g_circle_2D</code>	92
5.5.31	<code>g_circle_3D</code>	93
5.5.32	<code>g_circle_3D_core</code>	94
5.5.33	<code>g_polygon_2D</code>	96
5.5.34	<code>g_polyline_2D</code>	97
5.5.35	<code>g_polyline_3D</code>	98
5.5.36	<code>g_rectangle_3D</code>	99

5.5.37	<code>g_rectangle_3D_core</code>	100
5.5.38	<code>g_data_plot_2D</code>	101
5.5.39	<code>g_data_plot_3D</code>	102
5.5.40	<code>g_data_plot_f_3D</code>	103
5.6	上位関数	104
5.6.1	<code>g_contln_2D</code>	104
5.6.2	<code>g_contln_f_2D</code>	105
5.6.3	<code>g_bird_view_3D</code>	106
5.6.4	<code>g_bird_view_f_3D</code>	107
5.6.5	<code>g_isosurface_3D</code>	108
5.6.6	<code>g_isosurface_f_3D</code>	109
6	Version の履歴	110
7	おわりに	114
8	作者の覚書	115
8.1	新関数の追加方法	115
8.2	Manual の作成方法	115
8.3	設計上の基本原則	115
8.4	ファイル構成	116
8.5	描画処理	116



# 1 はじめに

本章では GLSC の歴史や GLSC3D の開発に至る経緯などを詳しく紹介します。手っ取り早く使いたい方は本章を読み飛ばしてください。

## 1.1 GLSC とその歴史

GLSC とは、Graphics Library for Scientific Computing の略で、科学計算の結果をディスプレイ上に表示するための簡単なグラフィックライブラリです<sup>\*1</sup>。GLSC は小林 亮氏、高橋 大輔氏、中野 浩氏、松木平 淳太氏によって開発されました。当時（1980 年頃）はコンピュータ環境こそ整っていましたが、その計算結果を可視化する汎用のソフトウェアが殆どありませんでした。そのような時代に、「ユーザーに出来るだけ負担をかけずに簡単に数値計算結果を可視化したい」という目的で GLSC は開発されました。今日では、計算結果を可視化するソフトウェアは gnuplot <sup>\*2</sup>を始め、Mathematica, MatLab<sup>\*3</sup>など様々なものがあります。したがって「GLSC を使わなければ、可視化はできないか？」と問われれば答えは No となります。しかしながら、今でも GLSC にはコアなファン<sup>\*4</sup>が沢山います。では、どのような点が GLSC は優れているのでしょうか？

## 1.2 GLSC の長所・短所

我々、数理科学者は現象と向き合い、数理モデルを作成しながら現象を理解することを生業としています。そして構成された数理モデルは、解析的に解くことは困難です。したがって、解を表示したりするためには、数値計算を行いその結果を可視化するしかありません。この時多くの場合、数値計算のコードが先に出来上がります。次にそれをグラフィカルに表示するためにグラフィック用のコードを作成します。

ランダムウォークを例に取りましょう。次のページにランダムウォークを計算する C コードを貼りつけてあります。r[i] は i 番目の粒子の位置 (整数値) を示します。19 行目まで計算することによって、変数 r[i] の値が更新されます。計算の結果がうまく行われているかを確認するために、21 行目以降ではそれらを端末に表示するコードが示されています。試しに計算をしてみましょう。結果がグラフィカルに表示されていないので、わかりにくいと感じるはずですが、そこで多くの場合、この結果を何らかの可視化ソフトを用い可視化します。先にも示したように、Free で手に入り、マニュアルも豊富に存在するということで、gnuplot は最近人気です。先の実行ファイルに対し、リダイレクション “>” を用いることで、計算結果を他のファイルに記録することができます。gnuplot にはこのデータを与えて可視化を行います。gnuplot は「与えられた座標に点

---

<sup>\*1</sup> “GLSC 小林 亮”と google 検索をかけるか、<http://www-mmc.es.hokudai.ac.jp/~masakazu/>を見てください

<sup>\*2</sup> <http://www.gnuplot.info/>

<sup>\*3</sup> Mathematica, Matlab は数式処理や簡単な数値計算もできるので、可視化ソフトというよりは「可視化もできる」ソフトというべきですね。

<sup>\*4</sup> もっとも授業などで最初に習った言語はその後を引きずるので、その影響で仕方なくという方もいるでしょうが...



を打つ」,「点どうしを先で結ぶ」,「鳥瞰図を作成する」など基本的な可視化を行うことができます. 先の例では, 端末での表示を見やすくするために計算結果に

----- Step = 0 -----

```

1 #include <stdio.h>
2 #include <stdlib.h>
3 #define      N      (10)
4 #define      STEP   (100)
5 int PlusMinus(void)
6 {
7     if(rand() < RAND_MAX / 2) return 1;
8     else                      return -1;
9 }
10 int main(void)
11 {
12     int      i, r[N], i_time;
13     //Initialize
14     for(i = 0; i < N; i++) r[i] = 0;
15     //Time Loop
16     for(i_time = 0; i_time < STEP; i_time++)
17     {
18         //Calc
19         for(i = 0; i < N; i++) r[i] += PlusMinus();
20         //Print
21         printf("----- Step = %d -----\\n", i_time);
22         for(i = 0; i < N; i++) printf("%3d ", r[i]);
23         printf("\\n");
24     }
25     return 0;
26 }

```

### 計算結果

```

----- Step = 0 -----
 1  1 -1  1 -1  1  1 -1 -1 -1
----- Step = 1 -----
 2  0 -2  2  0  0  0  0  0  0
----- Step = 2 -----
      :
      :
----- Step = 98 -----
-5 -15 13  1 -7 15 -3  1  7 -3
----- Step = 99 -----
-4 -16 12  2 -8 14 -4  0  6 -2

```

など并表示をしていましたが、gnuplot ではこのような文字列は受け付けません。よって、多くの場合、gnuplot に適するように計算結果をフォーマットし直す必要があります。この例でもわかるように、数値計算のコードを書いた後に可視化のコードを書くということが、多くの現場で行われていることでしょう。

この方法には大きな欠点があります。それは「リアルタイムに可視化できていない」という問題です。先の例では、数値計算はほんの一瞬で終わりますが、中には長時間の計算を必要とする場合もあります。そのような場合、「計算と同時に可視化もできたらいいのに」と多くの人は思うことでしょう。もちろん、gnuplot では `popen` 関数を用いて、C 言語から直接 gnuplot を呼ぶこともでき、この目的を達成出来ます。しかしながら、数値計算のコードよりも可視化のコードの部分が肥大化するという問題がよく起こります。この問題も、できるだけコードが肥大化しないように、プログラマが適切に関数を作ればよいのですが、C 言語から gnuplot を簡単かつスマート呼べるようなツールはないようです<sup>\*5</sup>。GLSC は C 言語から非常に簡単に呼ぶことができるように設計されており、数値計算をしながらリアルタイムに可視化を行うことが可能です。また、GLSC は内部で X Windowsy System<sup>\*6</sup>を使用しており、描画も非常に高速である長所があります。

その一方で、GLSC には短所もあります。例えば、gnuplot などの汎用ツールは次のように端末に打つとグラフを出します。

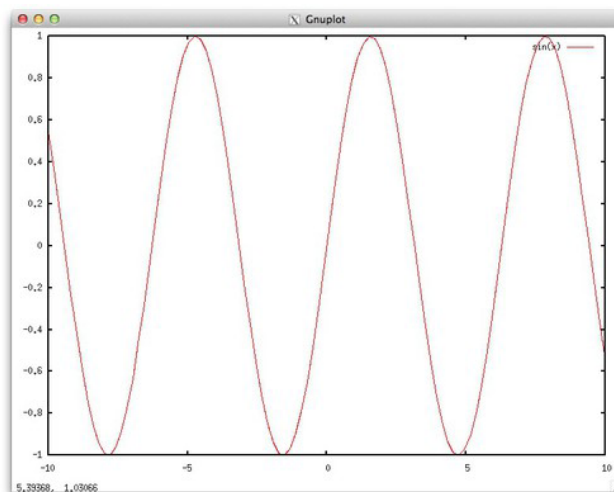
```
gnuplot> plot sin(x)
```

グラフが出るだけでなく、軸、目盛り、関数の名前など様々な情報を付加してくれます。これは gnuplot が内部的に適切に処理してくれているお陰です。しかしながら、GLSC にはそのようなものはありません。そのような付加情報を出したければユーザー自身が直接コードを書かねばなりません。多くの方はこのような点を挙げ「GLSC はそのような機能がついていないのがやだ」、「自分で書くのが面倒だ」と批判的になります。確かにそのような側面はありますが、逆に言えば「なんでもできる」ということになります。やや脱線しますが、開発者の小林亮氏から次のような話を聞いたことがあります。

「GLSC は確かになんでもはやってくれない、でも自由度が高い分、「ああしたい」、「こうしたい」という痒い所に手が届くんだ」

なるほど、含蓄のあるお言葉です。

どんなツールにも短所と長所があります。ですから“GLSC でないとできない事”というのは、今日ないでしょう。しかしながら、GLSC は“数値計算のプロ”たちが、自身の経験から使いやすい形にまとめた関数の集大成となっています。つまりメインの数値計算のコードに“程よい程度



<sup>\*5</sup> 2014.6.4 原稿作成時時点

<sup>\*6</sup> <http://www.x.org/>

の困難さで、ユーザーの思い描く自由なグラフィック発想を追加できる”という点が GLSC の長所なのです。

### 1.3 GLSC3D の開発まで

長所と短所の話をした後ですが、GLSC には致命的な問題がありました。それは 3 次元空間の描画を扱えない<sup>\*7</sup>ということです。GLSC 開発当時、3 次元計算を行うことは当時のスパコンでも大変でしたし、ましてや数値計算と同時に 3 次元の可視化をする必要もありませんでした。しかしながら、今日ではそのような話は普通に聞きます。作者は博士論文作成時<sup>\*8</sup>、非常に多くの 3 次元の数値計算を行っていましたが、GLSC では可視化ができず<sup>\*9</sup>、泣く泣く他の描画ツールを使った覚えがあります。その描画ツールはまったく痒い所に手が届かず、苦い経験をしたものです。その後も様々な文献を読み漁ったり、人に聞いたりして、使いやすそうな 3 次元可視化ツールを模索しました。数年模索をしましたが、結論から言えばそのようなツールはない、もしくはあっても非常に高い<sup>\*10</sup>ということでした。しかもそのようなソフトは、予想されたように、痒いところに手が届かなかったり、描画が非常に遅いという欠点もありました。“3 次元の良い描画ツールがないために、研究が滞る”ということを守るためにも、何らかの手を打たなければならない。そこで、筆者は GLSC3D の開発に着手しました。

#### 1.3.1 X Window System の限界

GLSC3D とはその名の通り、GLSC の 3 次元への拡張バージョンのことです。GLSC3D の基本的な思想や設計方針は GLSC と同じになるように設計されるべきです。このため、開発当初は新たな 3D の新関数を GLSC に追加する形で進められました<sup>\*11</sup>。しかしながら、GLSC は内部的に X Window System を Call するため、新たに追加できる 3D 機能は X Window System の許す制限までということになります。X Window System は優れたライブラリですが、3 次元の描画関数が乏しく、この路線での拡張は原理的に不可能と判断しました。そこで、他の描画ライブラリの使用を検討しました。

#### 1.3.2 OpenGL と GLUT の使用

3 次元の描画ライブラリとして有名なのは、やはり OpenGL(Open Graphics Library)<sup>\*12</sup>でしょう。DirectX<sup>\*13</sup>というライブラリも有名ですが、Windows 上でしか動かないので問題です。OpenGL は様々な環境で動作すること、描画が高速であること、そしてその名の通りオープンな API(Application Program Interface) であることから、GLSC3D の構築には最適です。

<sup>\*7</sup> もちろん鳥瞰図や、等値面を描く関数はありますが...

<sup>\*8</sup> 2010 年の冬頃

<sup>\*9</sup> もちろん、3 次元データから 2 次元の断片データをいくつか作り、可視化することは出来ましたが...

<sup>\*10</sup> AVS という有名な可視化ソフトがあります。教育向けの一番安いのも 15 万円以上はします。Mathematica も 20 万円はします...

<sup>\*11</sup> その名残が GLSC3.8 世代にて追加された `g_contln_3d` などです

<sup>\*12</sup> <http://www.opengl.org/>

<sup>\*13</sup> [http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft\\_DirectX](http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft_DirectX)

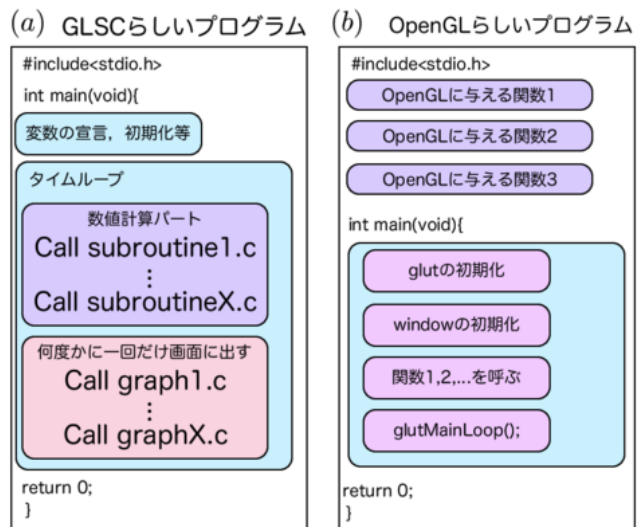
OpenGL はグラフィック専門の API なので、ウインドウを画面に出したり、マウスやキーボードのようなデバイスから操作を受け付けるためには他のライブラリを使用する<sup>\*14</sup>必要があります。それが GLUT(OpenGL Utility Toolkit)<sup>\*15</sup>です。GLUT はこのような OS 間でのデバイスの違いの差も吸収してくれます。そこで OpenGL でインタラクティブなグラフィックプログラムを制作するといえば、大抵は GLUT も使用することになります。

実は GLUT は 1998 年に発表された Version 3.7 以降整備が行われなくなってしまいました。それでは困るということで、いくつかの団体 (OpenGLUT<sup>\*16</sup>, FreeGLUT<sup>\*17</sup>) が GLUT と互換性のある新たなライブラリを開発してきました。どちらの団体でも良かったのですが、freeGLUT のほうが作者の開発環境である MacOS と相性がよいので、GLSC3D の開発では freeGLUT を採用しました<sup>\*18</sup>。これにて、GLSC3D の開発に必要な土台は準備出来ました。あとは、どのように実装するかという問題が残されました。

### 1.3.3 GLSC らしさと OpenGL らしさ

先にも説明したように、GLSC は数値計算屋さんの作った描画ライブラリです。筆者は何かプロジェクトをスタートさせる時、数値計算のプログラムパートに精力を注ぎ、次にグラフィックパートを作成します<sup>\*19</sup>。この時、数値計算を行いながら、可視化を行うわけですから、必然的にプログラムは (a) の様な構成になります。ここではこのようなプログラミング構成を GLSC らしいプログラミング構成と定義します<sup>\*20</sup>。

さて、OpenGL のサンプルプログラムが載っている教科書等を一度読んでみてください。きっとプログラム構成は (b) のようになっていると思います。すなわち OpenGL や GLUT の関数の準備を行い、それらを main 関数内で呼ぶような構成です。そして一番のポイントは glutMainLoop 関数が呼ばれているということです。glutMainLoop はコールバック関数と呼ばれる特殊な関数です。この関数は「プログラムの実行中、何かが起こった時に」登録された関数を呼び出す（呼び戻す）ことができるような関数です。具体的にいえば、マウスなどで 3D グラフィックを回転させたい時がありますが、そのようなイベントが発生した時に（つまりマウスの動きを察した時）、OpenGL 関数に対して「再描画せよ」



<sup>\*14</sup> このように書くと GLSC3D ではマウスやキーボードを使ってインタラクティブにグラフィックを行うことができますが、現時点 (2014.6.5) ではそのような関数は未実装です。

<sup>\*15</sup> <http://www.opengl.org/resources/libraries/glut/>

<sup>\*16</sup> <http://openglut.sourceforge.net/>

<sup>\*17</sup> <http://freeglut.sourceforge.net/>

<sup>\*18</sup> 何年か後に OpenGLUT 陣営が勝っていれば、それに合わせてプログラムを更新します...

<sup>\*19</sup> こう言うとグラフィックを疎かにしているようですが、グラフィックも綺麗にしないとインパクトのある講演はできませんからね... どちらも大事です。

<sup>\*20</sup> 「らしさ」を強要しているわけではありません。自由な発想に基づきプログラムをしてください。

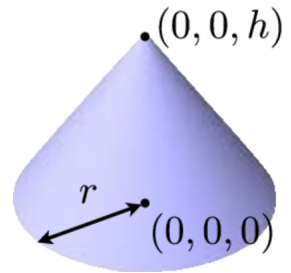
と命令するのです。OpenGL はグラフィックをプログラミングするために適した API ですので、このようなプログラミング構成になるのは至極当然のことです。私は今まで仕事柄、多くの人のプログラムを読んできましたが、OpenGL らしいプログラミング構成の中に、何とか数値計算のコードを潜り込ませ、実行させているのをよく見かけます。しかしながら、上記のように整理すればわかるように、このような OpenGL らしいプログラミング構成と GLSC らしいプログラミング構成とは相容れない関係なのは明白です。OpenGL の参考文献に載っているような「サンプルを数カ所変更すれば GLSC3D が完成！」というわけにはいかなかったからです。GLSC3D の開発は困難を極めました。

#### 1.3.4 GLSC3D の赤ちゃんの誕生

GLSC らしいプログラミング構成となるように、どのように OpenGL の関数を呼び、GLSC3D の設計をすればよいのかは長らく未解決でした。ある時、研究室の樋口亮君とある研究を行う中で、彼の OpenGL のプログラムをぼーっと見ていました。その時、このコードの一部に、これを解決するような構成方法を発見しました<sup>\*21</sup>。筆者はこのコードと発見こそが GLSC3D 開発に大きく貢献したと思います。この場を借りて、樋口君には感謝の意を捧げます。

### 1.4 GLSC3D の開発

GLSC3D の根幹部分は先が見えたので、あとは実際の描画関数の設計を行うことを考えます。例えば、円錐を描画する関数 `DrawCone` を考えます。円錐の底の中心が原点  $(0, 0, 0)$ 、尖った先端を  $(0, 0, h)$ 、円錐の半径を  $r$  として円錐の描画関数を設計することを考えます。`DrawCone` の引数<sup>\*22</sup>は  $h, r$  ということになります。当たり前ですが、この状態で描画される円錐はいつも底の中心が原点となっていますし、傾いた円錐というのでも描画できません。このような時、3D オブジェクトに対して平行移動や回転などを施してやれば目的を達成できます。しかしながら `DrawCone` は呼ばれた時点で、底の中心が原点となるようなものしか描画できません。どうすればよいでしょうか。一つの戦略は `DrawCone` 関数の引数を増やし、円錐の底の座標や傾きなどを追加し、`DrawCone` の内部設計を変える方法です。でも、これは開発者側はちょっと面倒なプログラミングをせねばなりません。



二つ目の戦略は OpenGL に用意されている

`glPushMatrix`, `glPopMatrix`, `glTranslatef`, `glRotatef`

などの関数を使うことです。詳細は他書<sup>\*23</sup>に委ねますが、簡単にいえば標準的な位置・方向の 3D オブジェクトに対して平行移動や回転などを施して、**描画時に**傾かせたり、移動させて見せたりする方法です。この方法はグラフィックスをメインとするようなプログラミング作成の際にはよく使われる手法です。しかしながら、GLSC3D はあくまでも数値計算をメインとするような人向

<sup>\*21</sup> 樋口君、会社員になっても元気か？ついに開発したぞ！

<sup>\*22</sup> 引数（ひきすう）と読みます。例えば関数  $f(x, y)$  なら  $x, y$  が引数です。とある学生がこの漢字を読めなかったもので...

<sup>\*23</sup> OpenGL プログラミングガイド 原著第 5 版など

けのツールです。したがって、この手のやり方をユーザに強制するのはいかなものか？ということになりました。そこで、GLSC3D では戦略 1 を取りました。戦略 1 は関数の引数が多くなり、開発に手間がかかるという欠点がありますが、3D オブジェクトの描画を任意の位置や方向に制御可能です。引数が多いなと感じる方もいるとは思いますが、試行錯誤の末、削りに削ったものです。もし、気に入らなければ、引数の少ない描画関数を自身で設計することも可能です。

このような経緯がありましたが、当面の問題は解決され GLSC3D の開発はスタートしました。

## 1.5 GLSC3D の設計哲学

GLSC3D は GLSC と同じ設計哲学を有します。それはおよそ以下の様な設計哲学です。

### 数値計算のコードを邪魔しない

先の述べたように、多くの場合数値シミュレーションのプログラムは、根幹をなす数値計算コードの部分が先に完成され、その後描画のパートが作成されます。したがって GLSC3D はもとの数値計算コードの部分に大きな変更を求めたり、後からの追加が困難であるように設計されてはなりません。したがって簡単な手続きで、GLSC3D のコードをもとのコードに埋め込めることができるように設計されるべきです。

### 関数の引数は必要最低限にせよ

関数の引数は多ければ多いほど豊かな動作が可能です。しかしながら、関数の引数が多いと「この関数の引数はなんだっけ？順番はどうだったっけ？」という問題が発生し、マニュアルとにらめっこしなければなりません。したがって関数の引数は、「その関数の動作に支障きたさない範囲内で最低限のレベルまで減らす」ことが求められます。例えば球を描画する場合はどのように工夫をしても、中心座標と半径は引数として必要でしょう。したがって `g_sphere_3D` 関数はこのような引数を必須としています。一方で `g_sphere` で球を描画していると、「ゴツゴツしているのでもう少しなめらかな球を描きたい、ワイヤフレームで描きたい、etc...」といった欲望が出てくる場合もあります。そのような場合に備えて GLSC3D では、ほとんどすべての関数に添字“\_core”のついた上位版の関数を用意しています。例えば `g_sphere_3D_core` は球面の分割レベル、面の三角形分割のレベル、ワイヤフレームにするかどうかなどを指定することができます（詳細は関数の説明を御覧ください）。GLSC3D では一般に関数 `g_A`, `g_A_core` が存在する場合 `g_A` は内部的に `g_A_core` を Call しています。

### だからと言って構造体などで包まない

構造体を使えば、一つの構造体を関数に渡せばあたかも多数の引数を渡したことと同等のことが実現できます。しかしながら、この方法も結局「この関数の構造体のメンバーはなんだっけ？型の名前はなんだっけ？」という問題が発生し、マニュアルとにらめっこしなければなりません。そのようなことから GLSC3D では構造体を通して引数を渡すことをしません。もし「引数が多くて嫌だな...」と思われる場合は、ユーザー自身で構造体を作成し GLSC3D の関数をラッピングしてご使用ください。<sup>\*24</sup>

<sup>\*24</sup> とは言っても 3 次元の計算ツールなので、座標ぐらいは構造体にしたい気分です。そのうちリリースするかもしれません

## ユーザーが自由に関数を設計できる

先に `g_sphere_3D` を例にしましたが、例えば「球面の北極部分を赤く、南極部分を青く、さらに赤道部分は緑にしたい」という欲望が出た場合、`g_sphere_3D_core` ではもはや手におえません。GLSC3D は「ユーザーが自由に関数を設計できるよう」に設計されるべきです。したがって一番細かいレベルの目的を達成できるようなプリミティブな関数を提供すべきです。GLSC3D では点を打つ、線を描く、面を描く、文字を書くといったような基本的な関数群を揃えてありますので、それを組み合わせて使用することで、どんな関数でも設計することが可能です。これらの使用方法を熟読し自由な発想で描画を楽しんでください。



## 2 GLSC および GLSC3D Ver2.x からの変更点及び注意点

GLSC3D は GLSC の設計哲学を引き継ぎ構築されています。理想的には、関数の命名規則、引数などがシームレスに繋がり、ユーザには「どこが変わったかわからない」と思わせるように設計すべきです。しかしながら、それぞれの基盤ライブラリである OpenGL と X Window System は全く異なるものです。したがって、GLSC3D の開発は 0 から作り上げていく方式を取らざるを得ませんでした。そして開発中、どうしても変更せざるを得ないいくつかの点が生じました。また、3次元化されたこと及び新関数の導入によって、GLSC とは別の新たな注意点が発生しました。マニュアルの順番としては GLSC3D の関数を紹介した後に本章を置くべきですが、非常に重要な変更のため本章にてお知らせします。

### 2.1 GLSC からの変更点

#### 2.1.1 Fortran 言語をサポートしていない

GLSC では Fortran をサポートしていましたが、GLSC3D ではサポートしていません。未来永劫に渡り、Fortran をサポートしないわけではありません。GLSC 同様に内部的にはすべてをポインタ渡しに Wrap すると、Fortran から C を Call できますので、Fortran に強い方で Wrapper プログラムを書いてもいいよという方は筆者までお知らせください。

#### 2.1.2 最終の描画スタイルの変更

3次元オブジェクトを描画する際、OpenGL では描画命令をいくつかのまとまった単位になるまで保持し、一気に描画するというスタイルが取られます。また描画の最初と最後を明示的に指定しなければなりません(下記参照)。\*<sup>25</sup>

OpenGL の描画スタイル (3次元空間内で線分を描画する場合)

```
glBegin(GL_LINES);           /*線を描き始めることを指定*/
glVertex3f(0,0,0);           /*線分の端点を指定*/
glVertex3f(0,1,0);           /*線分の端点を指定*/
glEnd();                     /*線を描き終えたことを指定*/
glFlush();                   /*線を描く命令を実行*/
```

一方、GLSC で描画命令はその都度実行されます。したがって、描画の最初と最後を明示的に指定する必要はありません(下記参照)。

GLSC の描画スタイル (2次元空間内で線分を描画する場合)

```
g_move(0,0);                 /*線分の端点を指定*/
g_plot(0,1);                 /*線分の端点を指定*/
```

\*<sup>25</sup> この方法は OpenGL 3.1 以降では廃止されており Vertex Buffer と Vertex Array を使用する必要があります。

GLSC のほうが記述が楽で良さそうに思えますが、描画命令がその都度実行されるので、OpenGL に比べ（若干ですが）描画が遅くなったり、画面がちらついたりする可能性があります。<sup>\*26</sup>

GLSC3D では GLSC の哲学と OpenGL の良さを引き継いでいますので、次のように書くことができます。

GLSC3D の描画スタイル (3 次元空間内で線分を描画する) —

```
g_move_3D(0,0,0);           /*線分の端点を指定*/
g_plot_3D(0,1,0);           /*線分の端点を指定*/
g_finish();                 /*バッファの描画命令を実行*/
```

最後の `g_finish` ですが、GLSC ではなかった記述です。 `g_finish` はタイムループ内で描画関数が終わった時**最後に一度だけ**呼ぶ必要があります。この関数を呼ぶことで、今までバッファに溜まっていた描画命令が一気に実行されます。多くの場合、最終的な描画の後で画面を短い時間停止させます。GLSC ではそのような場合、 `g_sleep` 関数を用いていました。GLSC3D では最終的な描画の後で `g_finish` を用いる必要がありますので、次のようにプログラミングすることが多くなるでしょう。これが大きな変更点です。

GLSC3D の描画スタイル —

```
g_xxxx;                     /*描画 1*/
g_xxxx;                     /*描画 2*/
g_xxxx;                     /*描画 3*/
.
.
.
g_finish();                 /*バッファの描画命令を実行*/
g_sleep(0.05);              /*0.05 秒間停止する*/
```

<sup>\*26</sup> OpenGL ではちらつきを抑えるためにダブルバッファリングという手法を用いることができます。GLSC3D はこの手法を用いています。

## 2.2 GLSC3D Ver2.x からの変更点

### 2.2.1 OpenGL の最新規格への追従

OpenGL は 1992 年に誕生しました。1990 年代、GPU は決められた描画アルゴリズムしか実行できませんでした。その後 GPU は劇的に進化し、現在はシェーダーと呼ばれる GPU 上で実行されるプログラムを用いてグラフィックスの表示を行うことが一般的となっております。

2008 年に OpenGL 3.0 が発表され、従来の固定機能に由来する大量の API が非推奨と宣言され、翌年の OpenGL 3.1 で削除されました。現在も古いバージョンの OpenGL は残されているため固定機能を使い続けることはできますが、将来にわたって存在が保証されているわけではありません。GLSC は Ver 3.0 で OpenGL の最新バージョンと互換性を保つこととしました。

### 2.2.2 ウィンドウライブラリを FreeGLUT から SDL への変更

以前の GLSC3D では FreeGLUT を用いてウィンドウを表示していました。

Mac OS X 上では FreeGLUT はネイティブに動作せず、代わりに XQuartz を用いて X Window System 上で動作させる必要がありました。しかし XQuartz は

- XQuartz 上で利用できる OpenGL がバージョン 2.1 に限定されるため、非推奨な (OpenGL 3.1 以降廃止された) 描画方法しかできない
- ウィンドウのサイズ変更・最大化ができない
- Retina Display に対応していないため、MacBook Pro などでの表示が美しい
- 起動が遅い
- XQuartz 自体が将来にわたって存在するのかどうか怪しい

といった問題点があったため、使用するライブラリを FreeGLUT から SDL に変更しました。

### 2.2.3 2D の描画順の変更

以前の GLSC3D では 2D で先に描画したものが後に描画したものより優先して表示されていました。Ver 3.0 以降では後に描画したものが優先して表示されるように変更しました。

なお、3D モードの場合も奥行きが完全に一致したときには、同様の挙動になるように変更されています。

### 2.2.4 フォント埋め込みの廃止, フォント指定関数の変更, 日本語などの Unicode 文字への対応

以前の GLSC3D では 4 種類の日本語フォントをライブラリに埋め込んでいましたが、ファイルサイズが肥大化するためこれを廃止しました。GLSC3D 3.0 ではデフォルトのフォントを

Mac OS X	/System/Library/Fonts/ヒラギノ角ゴシック W4.ttc
Linux	/usr/share/fonts/opentype/noto/NotoSansCJK-Regular.ttc
Windows	C:/Windows/Fonts/Meiryo.ttc

から読み込みます。もしこの場所にフォントが存在しない場合、または違うフォントを使いたい場合、`g_text_font_core` にフォントファイル名を指定してください。また、`Source/g_text.cpp` 内の `DEFAULT_FONT_FILE` を書き換えてコンパイルし直せばデフォルトのフォントを変更することもできます。

埋め込みフォントを指定する関数 `g_text_font` を廃止しました。また、テキストのフォント指定 `g_text_font_core` とサイズ指定 `g_text_size` を分離しました。また、`g_def_text` 関数の `font` 引数は無視されます。

日本語や数学記号などの Unicode 文字に対応しました。これを用いる場合文字列のエンコードは必ず UTF-8 にしてください。gcc では文字列リテラルのエンコードはデフォルトで UTF-8 になります。お使いのコンパイラのデフォルトが UTF-8 でない場合、C++11 の `u8` プレフィックスを使用してみてください。(C++11 としてコンパイルする必要があります)

```
g_text_virtual_3D(0, 0, 0, u8"あいうえお");
```

## 2.2.5 ウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display の対応

Ver 3.0 以降ではウィンドウのサイズ変更・最大化と Apple Retina Display に対応しています。このため、`GLSC3D` は内部的にスケールファクターを保持しており、`g_init`, `g_init_core` に渡されたウィンドウサイズに対する現在のサイズの比率 (の水平方向と垂直方向の値の小さいほう) を使用します。スケールの対象になるのは次の関数です。

- `g_sel_scale_2D`, `g_sel_scale_3D`
- `g_marker_size`, `g_line_width`, `g_text_size`
- `g_text_standard`
- `g_input_state` (マウス座標の逆変換)

Ver 3.0 以降では `g_sel_scale_2D`, `g_sel_scale_3D` を (最初に 1 回だけ呼ぶのではなく) ループ内で使用することをお勧めします。これによりウィンドウサイズの変更に適切に対応できるようになります。

`g_capture` を用いる場合、ウィンドウサイズの変更は行わないでください。

Apple Retina Display の対応はデフォルトでは無効になっています。有効化する場合、`g_enable_highdpi` を `g_init(_core)` の前に呼び出してください。この場合、スケールファクターの初期値は 2 になります。それ以外の場合、スケールファクターの初期値は 1 です。

## 2.2.6 マーカーの種類の追加

`g_marker_type` として正方形、円のほかに球を指定できるようにしました。引数には定数 `G_MARKER_SQUARE=0`, `G_MARKER_CIRCLE=1`, `G_MARKER_SPHERE=2` を指定できます。

球マーカーは 3 次元で小さな球を大量に描画する目的に最適化されており高速に動作します。そのような目的では `g_sphere_3D(_core)` を使用しないでください。

どの種類のマーカーでも、サイズは `g_marker_size` によりピクセル単位の直径を指定できる

ほか、`g_marker_radius` により仮想座標系での半径を指定することができます。

### 2.2.7 その他

Ver 3.0 以降ではライトの最大数を 3 つに変更しました。これは 4 つ以上のライトは不要と判断してのことですが、要望がある方は本マニュアルの“おわりに”をご覧ください。

`g_init_core` に指定するウィンドウの位置として、画面の中央に表示することを意味する `G_WINDOW_CENTERED` を指定できるようにしました。 `g_init` を使用した場合のウィンドウの位置は常に `G_WINDOW_CENTERED` となります。

多次元配列を受け取る関数

`g_bird_view_3D`, `g_contln_2D`, `g_data_plot_3D`, `g_isosurface_3D`

はプリプロセッサマクロにより対応する 1 次元配列版

`g_bird_view_f_3D`, `g_contln_f_2D`, `g_data_plot_f_3D`, `g_isosurface_f_3D`

に変換されるようにしました。今後は C++ でも多次元配列版を使うことができます。

## 2.3 GLSC3D の注意点

### 2.3.1 物体の透明化における注意点 (Ver1.x をお使いの方へ)

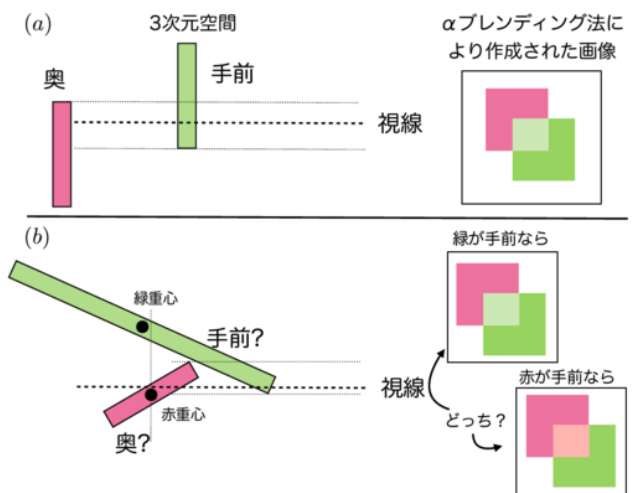
2枚の板が重なっている状況を考えます。3次元では奥行き情報があるので、それを元にどちらが手前にあるかを判定し( $z$ バッファ法と呼ばれます)描画を行います。GLSCでは物体の透明化処理はできませんでしたが、



GLSC3Dでは $\alpha$ ブレンディング法を用いて透明化処理を行うことができます。 $\alpha$ ブレンディング法はオブジェクトとオブジェクトが重なるとき、視点に対して手前にあるオブジェクトの色を、奥にあるオブジェクトの色と混ぜ合わせ描画することによって、透明化処理を行います。このことからわかるように、 $\alpha$ ブレンディング法は $z$ バッファ法と同時に使うことは原理的に不可能です。そこで、 $\alpha$ ブレンディング法を使用する際は、 $z$ バッファ法はOFFにし、視点に対して奥の方から先に3Dオブジェクトの描画を行う必要があります。GLSC3Dでは $\alpha$ ブレンディング法を使用する際に自動的に $z$ バッファ法はOFFになり<sup>\*27</sup>ですが、**視点に対して奥の方から先に3Dオブジェクトの描画行う**ことはプログラマの責任となります。

このように書くと、それを自動化できないのか?と思う方もいると思います。回答として「原理的には可能なはず、しかしながら、非常に困難」であるといえます。 $\alpha$ ブレンディング法の肝は「視点に対して奥の方から先に3Dオブジェクトの描画行う」ことです。つまり視点に対してどのオブジェクトが奥にあるか?ということを自動的に判定せねばなりません。`g_finish`が呼ばれた瞬間にこの自動判定を行うことができれば、原理的には可能です。しかしながら、物体が何かの物体の手前あるもしくは奥にあるとはどういうこととして定義されるでしょうか?

図(a)では視線に対して、緑のオブジェクトが手前、赤が奥となっています。緑のオブジェクトを構成するどの頂点も、赤のオブジェクトを構成する頂点よりも手前にあることが計算できるので、自動的に奥行き判定をすることができ、 $\alpha$ ブレンディング法を実行できます。



一方(b)も同じ状況ですが、緑のオブジェクトを構成する頂点は、赤のオブジェクトを構成する頂点よりも手前、もしくは奥にある

ため一概には判定できません。情報を減らして、それぞれの重心位置で比較することも考えられますが、この場合は「緑が奥にある」と判定されてしまい、意図した結果となりません。

$\alpha$ ブレンディング法を実行するために3次元オブジェクトの手前と奥を特徴づけるよい方法があれば良いのですが、筆者の調べた限りでは、そのような方法はないようです。バージョン1.xの

<sup>\*27</sup> GLSC3Dでは $\alpha$ ブレンディング法の使用が終わると $z$ バッファ法は自動的にONになります。つまり $\alpha$ ブレンディング法が特別扱いにされています。

GLSC3D では、 $\alpha$  ブレンディング法における本問題はプログラマの責任で対処するしかなさそうです。

### 2.3.2 物体の透明化における注意点 (Ver1.x 以降 をお使いの方へ)

しかしながら、これでは不便であるということで Ver2.0 からはある手続きを行うことで透明化処理を自動的に行わせることが可能となりました。(この処理を自動的に実行させるためには、GLSC3D の初期化関数 `g_init_core` にて `g_enable_transparent_out = 1` としてください。) ですので、以降の説明は必ずしも読む必要はありませんが、高度なプログラミングを行いたい方は知識として知っておいてください。

関数を基本的なアイデアは簡単で以下のような手続きを踏んでいます。

- ステップ 1: 任意の 3 次元オブジェクトを 3 角形分割する
- ステップ 2: 3 角形分割された描画命令を溜め込む
- ステップ 3: 3 角形の重心を求め、視点に対して遠い順番に並べ替え溜め込む
- ステップ 4: `g_finish` が呼ばれた段階で、視点に対して遠い 3 角形から描画を行う

#### ステップ 1: 任意の 3 次元オブジェクトを 3 角形分割する

任意の 3 次元オブジェクトは 3 角形分割によって描画することが可能です。分割数は多いほど滑らかな表示になります。GLSC3D では面を描く場合、内部の関数では最終的にはすべて `g_triangle_3D_core` が Call されています。逆にユーザーが自身で関数を設計する場合も `g_triangle_3D_core` を用いてプログラミングを行ってください。用いない場合は透明化処理が適切に自動化されません。

#### ステップ 2: 3 角形分割された描画命令を溜め込む

`g_enable_transparent = 1` の場合、GLSC3D は描画命令を溜め込むバッファ (以降 `TRIANGLE_BUFFER` と呼びます) を自動的に確保します。デフォルトの `TRIANGLE_BUFFER` のサイズは  $2^{20}$  個の三角形を登録できるようなサイズ (大体 500MB に相当) です。ほとんどこのサイズで問題は起きないはずですが、使用中 `too many triangles for triangle buffer` などと表示される場合は関数 `g_init_core` にてバッファサイズ (`TRIANGLE_BUFFER_SIZE`) をさらに大きくしてください。

#### ステップ 3: 3 角形の重心を求め、視点に対して遠い順番に並べ替え溜め込む

3 角形の重心を求めることは容易ですが、視点に対して遠い順番に並べ替える方法をどのように実装するかは難しい問題でした。GLSC3D では 3 角形の描画命令を `TEMPORARY_TRIANGLE_BUFFER_SIZE` の数だけクイックソートアルゴリズムを用いてソートし、テンポラリなバッファ (以降 `TEMPORARY_TRIANGLE_BUFFER` と呼びます) にスタックします。その後、マージソートアルゴリズムを用いて `TRIANGLE_BUFFER` にマージ&ソートし情報をアップデートします。このように `TRIANGLE_BUFFER` は現時点の `TRIANGLE_BUFFER` と `TEMPORARY_TRIANGLE_BUFFER` から作られます。どのようなアルゴリズムを用いてソートを行うことが最も高速となるかは自明ではないため、様々なアルゴリズムを組み合わせで用いました。その結果、少なくとも筆者の環境ではこの方式が最も高速でした。デフォルトの設定では

TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER のサイズ TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE は  $2^{10}$  個の三角形を登録できるようなサイズです。このサイズが極端に大きかったり、小さかったりすると描画が非常に遅くなることが確認されています。ただし、ここでいうサイズの大きさの問題は、描画すべき対象に依った問題となりますので、最適値はわかりません\*28。多くの場合、デフォルト値で問題は生じないと思われますが、描画遅いなどの問題が生じた場合は関数 `g_init_core` にて TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を変更し最適値を見つけてください。

#### ステップ 4: `g_finish` が呼ばれた段階で、視点に対して遠い 3 角形から描画を行う

ステップ 3 までの処理で、TRIANGLE\_BUFFER には視点から遠い順番で三角形の描画命令が登録されています。これらの三角形は `g_finish` 関数が呼ばれた時点で描画されます。

GLSC3D では GLSC と同様に標準座標系の中に複数の仮想座標系を構築することができますが、このステップ 1~4 は複数の仮想座標系において自動的に適用されます。したがって、**ユーザーは `g_triangle_3D_core` を用いて描画さえすれば、特に何も意識しなくても、正しく透明化処理を行うことができます。**ただし、透明化処理を行う際には別の注意も必要です。それは「3 次元オブジェクトの三角形分割は十分に細かくなければならない」という点です。ステップ 3 において、3 次元オブジェクトを大きな三角形で分割すると、分割が荒いことが影響し視点に対する奥行き判定の際に、ミスが生じます。このことを防ぐためには、3 次元オブジェクトの三角形分割は十分に細かくする必要があります。例えば、`g_sphere` という関数は与えられ点を中心に、与えられた半径の球を描画する関数です。この関数にはその上位関数として `g_sphere_core` が存在しますが、その引数として `int DivideLevel` があります。この `DivideLevel` を 0 として指定する場合は 1 つの 3 角形を描きますが、1 を指定すると 4 個の 3 角形、2 を指定すると 16 個の 3 角形という具合に親 3 角形をさらに小さな子三角形へと分解し描画します。このような機能はほぼすべての描画関数に対して存在しますので、有効に活用してください。

透明化処理を行う際は、この点に注意いただくとともに、もし、さらに良いアイデアをお持ちの方がいましたら教えてください。

---

\*28 将来的には描画の時間を内部的に取得し、最適値を漸近的に求めるようにするかもしれません



## 3 動作環境とその構築

Ver. 3.0 では依存ライブラリとインストール方法が変更されています。必ずお読みください。

### 3.1 動作環境

GLSC3D 3.0 は OpenGL, SDL, libPNG, FreeType, Math ライブラリに依存します。OpenGL, SDL は GLSC3D の根幹部分です。PNG ライブラリは画面をキャプチャするために必要です<sup>\*29</sup>。C 言語の Math ライブラリは描画関数内で数学関数を用いているために必要です。デフォルトの設定では概ね 500KB のメモリー領域を使用します。

多くの場合、MacOS<sup>\*30</sup>, Linux, UNIX では SDL 以外は標準的にインストールされています。

### 3.2 動作環境の構築

#### 3.2.1 Mac OS X の場合

**Xcode のインストール：**

Mac OS X は Xcode を導入しなければ、様々な開発環境がインストールされません。まず Xcode をインストールしてください。App Store で Xcode を検索すればトップに表示されます。

**SDL, libPNG, Freetype のインストール：**

XQuartz を使用しないため、これらは MacPorts を用いてインストールしてください。

MacPorts は通常/opt/local/bin/port にあります。

```
sudo port install libSDL2-devel
```

```
sudo port install libpng
```

```
sudo port install libfreetype
```

ヘッダファイルは/opt/local/include, ライブラリは/opt/local/lib に保存されます。

#### 3.2.2 Linux の場合

Linux でも多くの場合、環境は整っているはずです。ここでは念のため、動作環境の構築方法を紹介します。Linux は様々なディストリビューションが存在しますが、チェックすべきポイントはほとんど変わりません。ここでは特に debian 系と fedora 系のディストリビューションの場合を例に挙げて解説します。debian 系には Ubuntu, fedora 系には RHEL, CentOS 等が含まれます。自身の状況に合わせ、適宜情報を読み替えてください。

**OpenGL, freeGLUT, FreeType のインストール：**

インストールすべきパッケージはディストリビューション毎に違うので、先ず、それを確認します。

---

<sup>\*29</sup> <http://www.libpng.org/pub/png/libpng.html>

<sup>\*30</sup> MacOS は UNIX と認められましたが...

#### インストールするパッケージの確認

```
//debian 系
%sudo apt search freeglut
%sudo apt search freetype
//fedora 系
%sudo yum search freeglut
%sudo yum search freetype
```

リストされたパッケージの中に、freeglut の開発者用ライブラリとヘッダがあるはずなので、それをインストールします。例えば、CentOS 6.5 では、`freeglut-devel` パッケージをインストールすることになります。

#### パッケージをインストール

```
//debian 系
%sudo apt install package
//fedora 系
%sudo yum install package
```

*package* にはインストールすべきパッケージの名前を入れて下さい。例えば、CentOS 6.5 では、`freeglut-devel` になります。

OpenGL は殆どのディストリビューションでは、最初からインストールされているか、freeglut の依存関係で自動的にインストールされます。明示的にインストールする必要は殆どの場合、ありません。

### 3.2.3 Windows の場合

Windows を使用する場合、Visual Studio 2017 を使ってください。Visual Studio 2017 では CMake がサポートされています。Community Edition は無料で使用することができます。インストールの際は C++ によるデスクトップ開発にチェックを入れてください。

## 4 GLSC3D のインストールとテスト

GLSC3D は一般的なソフトウェアと同じように、ライブラリ (libglsc3d.a, libglsc3d.dylib, libglsc3d.so(linux のみ)) とヘッダーファイル (glsc3d.h) の 2 つで提供されます。そこで、本章ではこれらのファイルの作成方法とインストールの方法に関して説明します。

GLSC3D.zip をデスクトップに展開してください。GLSC3D の構成は右のようになっているはずです。ここからはターミナルでの操作となります。Src フォルダに移動し、make を実行してください。すなわち、

```
$: cd Src
```

```
$: make
```

としてください。様々なファイルがコンパイルされ Out フォルダにライブラリ (libglsc3d.a, libglsc3d.dylib, libglsc3d.so(linux のみ)) とヘッダーファ

イル (glsc3d.h) が作成されます。もし、作成されない場合は /usr/X11R6/lib に OpenGL, GLUT, PNG ライブラリが、/usr/X11R6/include にそれらのヘッダーファイルがそれぞれ置かれていないことが原因です。適切な場所に置くか、Makefile を書き換えてください。筆者は MacOS, Ubuntu, CentOS などの環境で問題なく作成されることを確認しています。

作られたライブラリとヘッダーファイルが正常に動作すること確認するために、SampleProgram フォルダ下の using\_makefile フォルダに移動してください。そして make を実行してください。test\_program という実行ファイルが作られるので、実行してください。すなわち、

```
$: cd ../SampleProgram/using_makefile
```

```
$: make
```

```
$: ./Run
```

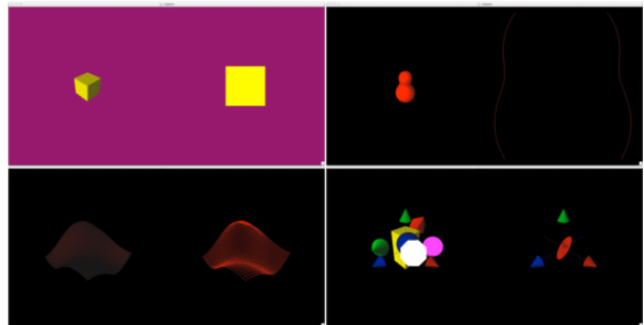
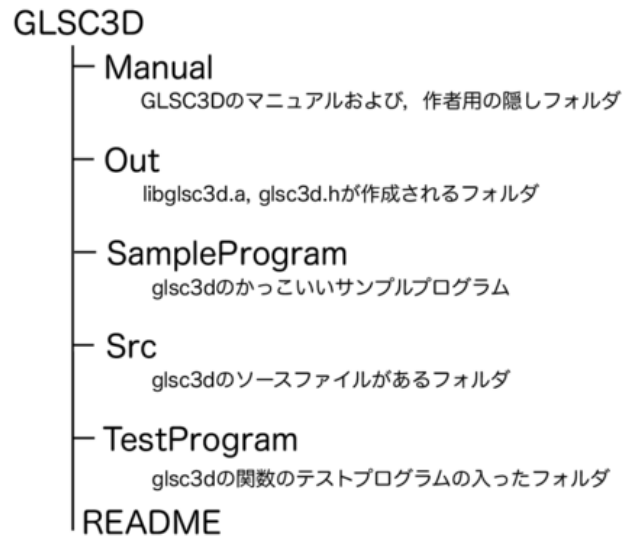
としてください。GLSC3D のデモプログラムが実行されます。

Linux の場合は

```
$: ./Run_linux
```

としてください。GLSC3D のデモプログラムが実行されます。

SampleProgram/using\_glsc3dcommand では、Make コマンドを使用せずにデモプログラムを実行できます。その際、GLSC3D 用のコマンド ccg を用いています。どちらの場合でも正常にデ



モプログラムが実行されているかを確認して下さい。確認がとれたらライブラリ (`libglsc3d.a`, `libglsc3d.dylib`, `libglsc3d.so`(linux のみ)) とヘッダーファイル (`glsc3d.h`) とヘッダーファイル (`glsc3d.h`) を適切な場所へコピーします。筆者は自身の home ディレクトリの下に `lib` と、`include` フォルダを作成し、それぞれのファイルを置くことを推奨します。そこでライブラリが作られたことを確認した後に以下のように打ってください。

```
$: make install
```

これは

```
$: cp Out/libglsc3d.a Out/libglsc3d.dylib ~/lib/ (mac の場合)
```

```
$: cp Out/libglsc3d.a Out/libglsc3d.so ~/lib/ (linux の場合)
```

```
$: cp Out/glsc3d.h ~/include/
```

と同じ意味です。

`su` の権限を持つならば、`/usr/lib` や `/usr/include` 下のようなパスの通ったフォルダに置いてもいいでしょう。

そこでライブラリが作られたことを確認した後に以下のように打ってください。

```
$: make install_root
```

これは

```
$: sudo cp Out/libglsc3d.a Out/libglsc3d.dylib /usr/lib/ (mac の場合)
```

```
$: sudo cp Out/libglsc3d.a Out/libglsc3d.so /usr/lib/ (linux の場合)
```

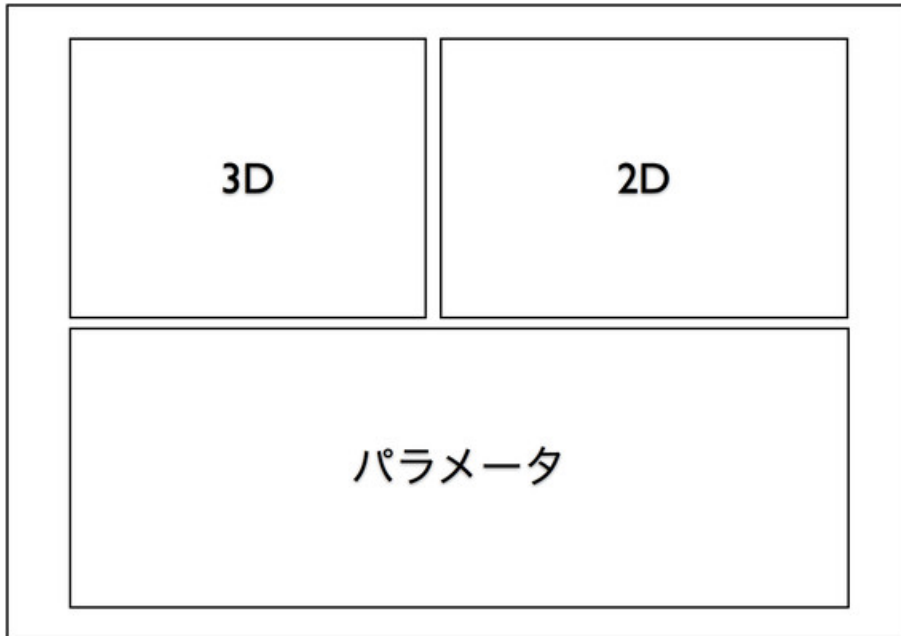
```
$: sudo cp Out/glsc3d.h /usr/include/
```

と同じ意味です。

これにてインストールは完了です。

## 5 GLSC3D の関数

GLSC3D は GLSC と同様に一枚のキャンバスに対して、いくつかの絵を描画するようなソフトであると考えてください。適切な関数を用い、キャンバスをいくつかのエリアに区切り、それぞれのエリアに描きたいもの（3次元、2次元、テキスト等）を描画することができます。



GLSC3D を利用する際、多くの場合基本的な枠組みは以下のような形態となるでしょう。ここでは我々が用意した関数それぞれについての説明とその実行例も記載しておりますので、個々の関数の使用方法はそちらをご覧ください。なお、具体的な使用例はサンプルプログラムがありますので、そちらをご覧ください。

## 基本的な枠組み

```
#include <...>
...
#include <glsc3d.h>

int main()
{
    g_init(...); //用紙の設定
    g_def_scale_3D(0,...); //0 番の仮想座標系の定義
    g_def_scale_3D(1,...); //1 番の仮想座標系の定義
    ...

    /*****
        数値計算
    *****/

    g_cls(); //用紙を背景色で塗りつぶす

    //仮想座標系を選択→属性を指定→描画関数で描画.
    g_sel_scale_3D(0); //0 番の仮想座標系を選択（以下，0 番の仮想座標系に描かれる。）
    g_area_color_3D(...); //塗りつぶしの色を指定
    g_box_3D(...); //3 次元空間に box を描画
    ...

    //仮想座標系を選択→属性を指定→描画関数で描画.
    g_sel_scale_3D(1); //1 番の仮想座標系を選択（以下，1 番の仮想座標系に描かれる。）
    g_area_color_3D(...); //塗りつぶしの色を指定
    g_sphere_3D(...); //3 次元空間に sphere を描画
    ...

    g_finish(); //描画する
    return 0;
}
```

## 用語の解説

- ・標準座標系：標準座標系とは，ディスプレイ左上を (0.0,0.0) とするピクセル単位の座標系のこと。

- ・仮想座標系：仮想座標系とは、`g_def_scale` で定義する座標系のこと。先の例で言えばキャンバスは標準座標系、さらにキャンバス内のあるエリアは仮想座標系となります。GLSC3D ではいくつかの例外を除いて描画は仮想座標系に対して行われます。（例外：`g_text_standard`）。
- ・属性：例えば線を描く場合、色や線の太さなどを指定したいこともあります。色や線の太さなどを属性と呼び、属性を適切に設定することで、描きたい描画対象の属性を変更し描くことができます。この属性は属性コントロール関数を用いて変化させることができます。

#### 関数名について

- ・“\_2D”や“\_3D”がついていないもの・・・2次元描画と3次元描画で共に使用可能。
- ・“\_2D”がついてるもの・・・2次元描画のみで使用可能、もしくは、3次元描画で使用すると描画が不自然となるもの。
- ・“\_3D”がついてるもの・・・3次元描画のみで使用可能、もしくは、2次元描画で使用すると描画が不自然となるもの。

## 5.1 制御関数

### 5.1.1 g\_init

g\_init 関数

```
void g_init(  
    const char *WindowName,  
    int width, int height);
```

WindowName ; ウィンドウの名前, 又は G\_OFF\_SCREEN を設定します. G\_OFF\_SCREEN では画面は表示されません

width ; ウィンドウの幅 (ディスプレイ上の座標 (ピクセル単位))

height ; ウィンドウの高さ (ディスプレイ上の座標 (ピクセル単位))

g\_init 関数の説明

描画するウィンドウを設定するための関数です. ウィンドウはディスプレイの中央に表示されます. G\_OFF\_SCREEN を設定した場合, 画面は表示されませんが, キャプチャーは問題なく行えます. ※当然ながら, マウス・キーボードを用いたインタラクティブな操作は出来なくなります.



### 5.1.2 g\_init\_core

g\_init\_core 関数

```
void g_init_core(
    const char *WindowName,
    int width, int height,
    int pos_x, int pos_y,
    float r, float g, float b,
    int enable_transparent,
    int temporary_triangle_buffer_size,
    int triangle_buffer_size);
```

WindowName ; ウィンドウの名前, 又は G\_OFF\_SCREEN を設定します. G\_OFF\_SCREEN では画面は表示されません

width ; ウィンドウの幅 (ピクセル単位)

height ; ウィンドウの高さ (ピクセル単位)

pos\_x ; ウィンドウの左上 x 座標 (ピクセル単位) または G\_WINDOW\_CENTERED

pos\_y ; ウィンドウの左上 y 座標 (ピクセル単位) または G\_WINDOW\_CENTERED

r, g, b ; 背景色の初期値を設定 (不透明度は 1 に固定)

enable\_transparent ; 透明化処理にて並び替え機能を使用するか (1) しないか (0).

temporary\_triangle\_buffer\_size ;

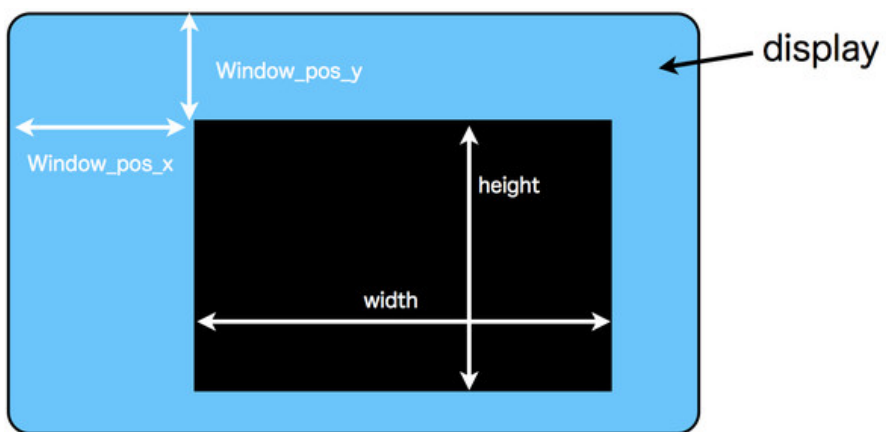
透明化処理用の TEMPORARY\_TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を指定する. デフォルトは  $2^{10}$

triangle\_buffer\_size ; 透明化処理用の TRIANGLE\_BUFFER\_SIZE を指定する. デフォルトは  $2^{20}$

g\_init\_core 関数の説明

描画するウィンドウを設定するための関数です. g\_init に比べて細かい制御が可能です.

Since Ver 3.0: pos\_x, pos\_y に G\_WINDOW\_CENTERED を指定すると, ウィンドウをディスプレイの中央に表示します.



### 5.1.3 g\_init\_light

g\_init\_light 関数

```
void g_init_light(
    int lightnum,
    float x, float y, float z);
```

lightnum ; ライトの番号 (0~2)

x, y, z ; ライトの方向座標

g\_init\_light 関数の説明

ライトの方向を設定するための関数です。ライトは常に平行光源です。ライト 0 から 2 の 3 個までの光源を設定できます。この関数を呼ばずに描画した場合、デフォルト値として g\_init\_light(0,1,1,1) の光源が設定されます。

### 5.1.4 g\_init\_light\_core

g\_init\_light\_core 関数

```
void g_init_light_core(
    int lightnum,
    float x, float y, float z, float power);
```

lightnum ; ライトの番号 (0~2)

x, y, z ; ライトの方向座標

power ; ライトの強さ

g\_init\_light\_core 関数の説明

g\_init\_light とほぼ同じですが、光源の強さを指定できます。

### 5.1.5 g\_disable\_light

g\_disable\_light 関数

```
void g_disable_light(
    int lightnum);
```

lightnum ; ライトの番号 (0~2)

g\_disable\_light 関数の説明

g\_init\_light, g\_init\_light\_core によって有効化されたライトを無効化します。

### 5.1.6 g\_scr\_color

g\_scr\_color 関数

```
void g_scr_color(  
    float r, float g, float b, float a);
```

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

g\_scr\_color 関数の説明

背景色を設定するための関数です.



### 5.1.7 g\_cls

g\_cls 関数

```
void g_cls();
```

g\_cls 関数の説明

新しいフレームを背景色で塗りつぶす.

### 5.1.8 g\_finish

g\_finish 関数

```
void g_finish();
```

g\_finish 関数の説明

この関数を呼ぶことで描画することができます。

### 5.1.9 g\_sleep

g\_sleep 関数

```
void g_sleep(  
    double wait_time);
```

wait\_time ; 静止時間 (秒)

g\_sleep 関数の説明

指定した秒数だけ静止します。

## 5.1.10 g\_capture\_set, g\_capture

g\_capture\_set, g\_capture 関数

```
void g_capture_set(
    const char *name);
void g_capture();
```

name ; 保存先のフォルダ名 (“” または NULL の場合, フォルダ名は「Frames 年. 月. 日. 時間. 分. 秒」となる.)

g\_capture\_set, g\_capture 関数の説明

画面を取り込むための準備を行う関数. (g\_capture\_set)

画面を取り込む関数. (g\_capture)

## 5.1.11 g\_enable\_highdpi

g\_enable\_highdpi 関数

```
void g_enable_highdpi();
```

g\_enable\_highdpi 関数の説明

Apple Retina Display のネイティブ解像度で描画するように指定します. この関数を使用するときは, 必ず g\_init(\_core) より前に使用してください.

## 5.2 補助関数

### 5.2.1 g\_key\_state, g\_input\_state

g\_key\_state 関数

```
G_INPUT_STATE g_key_state(
    G_KEY_CODE code);
```

code ; 取得する入力のコード

g\_input\_state 関数

```
G_INPUT_STATE g_input_state(
    G_KEY_CODE code, int *x, int *y);
```

code ; 取得する入力のコード

x,y ; 最後にクリックされた位置 (標準座標系) を格納する変数へのポインタ (ヌルポインタを許容します.)

g\_key\_state, g\_input\_state 関数の説明

code で指定された入力を取得します. code には char 型のリテラル ('a', '@', '/' 等) か, G\_KEY\_F1, G\_KEY\_LEFT, G\_MOUSE\_LEFT 等の定数を指定します. 各入力の状態は, g\_finish が呼ばれた時点で更新されます. G\_KEY\*\*定数, および G\_INPUT\_STATE の詳細は事項以降を見てください.

G\_KEY\*\*定数

G_MOUSE_LEFT,	G_KEY_INVALID,	G_KEY_INSERT,	G_KEY_F1,	G_KEY_F7,
G_MOUSE_MIDDLE,	G_KEY_PAGE_UP,	G_KEY_LEFT,	G_KEY_F2,	G_KEY_F8,
G_MOUSE_RIGHT,	G_KEY_PAGE_DOWN,	G_KEY_UP,	G_KEY_F3,	G_KEY_F9,
	G_KEY_HOME,	G_KEY_RIGHT,	G_KEY_F4,	G_KEY_F10,
	G_KEY_END,	G_KEY_DOWN,	G_KEY_F5,	G_KEY_F11,
			G_KEY_F6,	G_KEY_F12,

### G\_input\_state 詳細

G\_NONE ; キーは押されていない

G\_DOWN ; キーが押された

G\_UP ; キーが解放された

G\_REPEAT ; キーが押しっぱなし

```
if(g_key_state('a') == G_DOWN)
```

```
{
```

```
    //a が入力された時の動作
```

```
}
```

```
int x, y;
```

```
if(g_input_state(G_MOUSE_LEFT, &x, &y) == G_DOWN)
```

```
{
```

```
    //左クリックされた時の動作
```

```
    printf( "x : %d\n" " y : %d\n" , x, y);
```

```
}
```

```
if(g_input_state(G_MOUSE_LEFT, NULL, NULL) == G_DOWN)
```

```
{
```

```
    //座標が必要無ければこれでも呼び出せます.
```

```
    //x 座標と y 座標両方に NULL を指定するのは g_key_state を使うのと等価です.
```

```
}
```



## 5.3 スケール関数

### 5.3.1 g\_def\_scale\_2D

g\_def\_scale\_2D 関数

```
void g_def_scale_2D(
    int id,
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    double x_left_std, double y_top_std,
    double width_std, double height_std);
```

id ; スケール番号

x\_left ; 仮想座標系の x 座標左端

x\_right ; 仮想座標系の x 座標右端

y\_bottom ; 仮想座標系の y 座標下端

y\_top ; 仮想座標系の y 座標上端

x\_left\_std ; 長方形の左辺の標準 x 座標

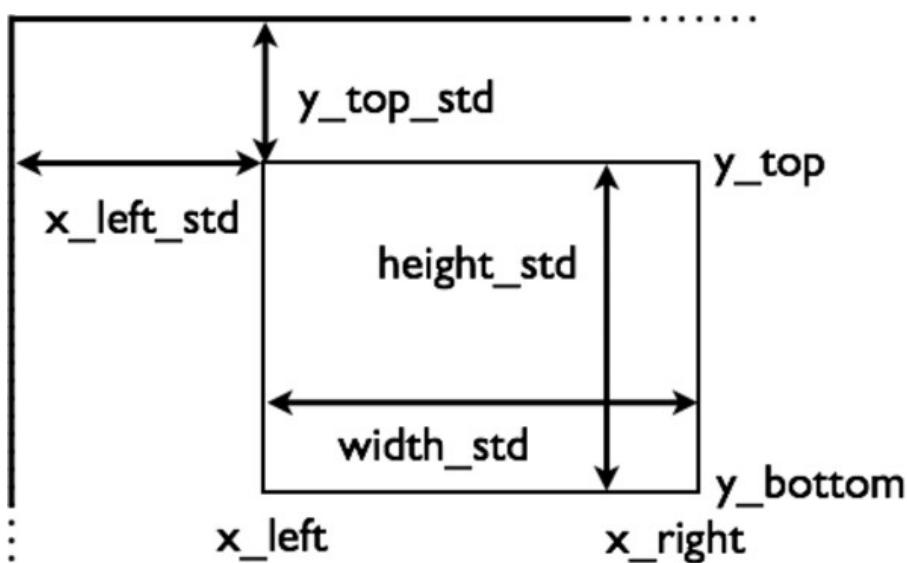
y\_top\_std ; 長方形の上辺の標準 y 座標

width\_std ; 長方形の標準面上での幅

height\_std ; 長方形の標準面上での高さ

g\_def\_scale\_2D 関数の説明

標準面上に 2 次元描画用の仮想座標系を定義する。



### 5.3.2 g\_def\_scale\_3D

#### g\_def\_scale\_3D 関数

```
void g_def_scale_3D(
    int id,
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    double z_near, double z_far,
    double x_left_std, double y_top_std,
    double width_std, double height_std,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double r);
```

id ; スケール番号

x\_left,x\_right,y\_bottom,y\_top,z\_near,z\_far ; 描画したい x,y,z 方向の範囲

x\_left\_std ; 長方形の左辺の標準 x 座標

y\_top\_std ; 長方形の上辺の標準 y 座標

width\_std ; 長方形の標準面上での幅

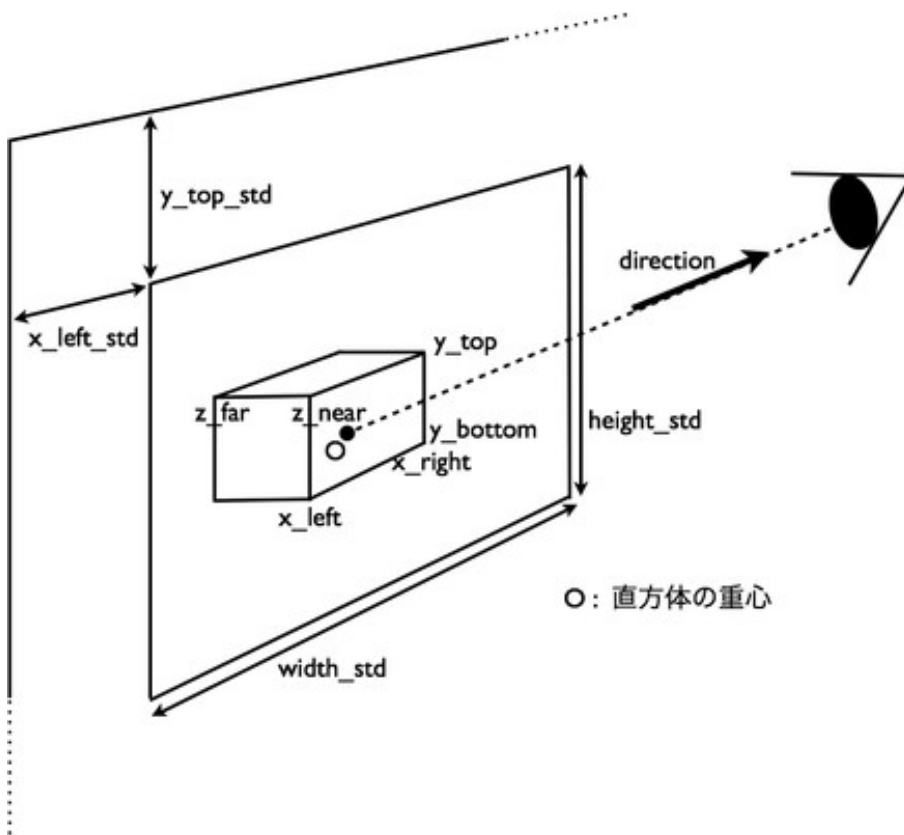
height\_std ; 長方形の標準面上での高さ

direction ; 描画範囲で指定した直方体の重心に対する視点方向 (図参照)

r ; 視点距離

#### g\_def\_scale\_3D 関数の説明

標準面上に 3 次元描画用の仮想座標系を定義する。座標軸は右手系で、y 軸正方向が画面上になるように設定されている。



### 5.3.3 g\_def\_scale\_3D\_core

g\_def\_scale\_3D\_core 関数

```
void g_def_scale_3D_core(
    int id,
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    double z_near, double z_far,
    double x_left_std, double y_top_std,
    double width_std, double height_std,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double r, double up_x, double up_y, double up_z);
```

id ; スケール番号

x\_left,x\_right,y\_bottom,y\_top,z\_near,z\_far ; 描画したい x,y,z 方向の範囲

x\_left\_std ; 長方形の左辺の標準 x 座標

y\_top\_std ; 長方形の上辺の標準 y 座標

width\_std ; 長方形の標準面上での幅

height\_std ; 長方形の標準面上での高さ

direction ; 描画範囲で指定した直方体の重心に対する視点方向 (図参照)

r ; 視点距離

up ; 画面上方向の指定

g\_def\_scale\_3D\_core 関数の説明

標準面上に 3 次元描画用の仮想座標系を定義する。画面上方向が設定可能になっている。

#### 5.3.4 g\_sel\_scale\_2D,g\_sel\_scale\_3D

g\_sel\_scale\_2D,g\_sel\_scale\_3D 関数

```
void g_sel_scale_2D(  
    int id);  
void g_sel_scale_3D(  
    int id);
```

id ; スケール番号

g\_sel\_scale\_2D,g\_sel\_scale\_3D 関数の説明

仮想座標系を選択する.

## 5.4 属性コントロール関数

### 5.4.1 g\_marker\_color

g\_marker\_color 関数

```
void g_marker_color(  
    float r, float g, float b, float a);  
  
r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )
```

g\_marker\_color 関数の説明

マーカーの色を変更する.

### 5.4.2 g\_marker\_size

g\_marker\_size 関数

```
void g_marker_size(  
    float size);  
  
size ; マーカーの大きさ (ピクセル単位)
```

g\_marker\_size 関数の説明

マーカーの大きさを変更する. ピクセル単位の直径を指定する.

### 5.4.3 g\_marker\_radius

g\_marker\_radius 関数

```
void g_marker_radius(  
    float size);  
  
size ; マーカーの大きさ (仮想座標系での半径)
```

g\_marker\_radius 関数の説明

マーカーの大きさを変更する. 仮想座標系での半径を指定する.

#### 5.4.4 g\_marker\_type

g\_marker\_type 関数

```
void g_marker_type(  
    unsigned int type);
```

type ; マーカーの種類

g\_marker\_type 関数の説明

マーカーの種類を変更する。使用できるマーカーの種類は以下の通り。

定数名	値	形状
G_MARKER_SQUARE	0	正方形
G_MARKER_CIRCLE	1	円
G_MARKER_SPHERE	2	球

マーカーに関するパフォーマンス上の注意

マーカータイプの変更はシェーダーの切り替えを伴うため、できるだけ同じ種類のマーカーをまとめて描画するようにすること。

また、マーカーサイズの変更は問題ないが、マーカーサイズの座標系 (g\_marker\_size または g\_marker\_radius) の変更もシェーダーの切り替えを伴うため、できるだけ同じ座標系のマーカーサイズをまとめて使用すること。

#### 5.4.5 g\_def\_marker

g\_def\_marker 関数

```
void g_def_marker(  
    int id,  
    float r, float b, float g, float a,  
    int type, float size);
```

id ; マーカーの属性番号

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

type ; マーカーの種類 (g\_marker\_type の説明を参照)

size ; マーカーの大きさ

g\_def\_marker 関数の説明

マーカーの属性セットを定義する.

#### 5.4.6 g\_sel\_marker

g\_sel\_marker 関数

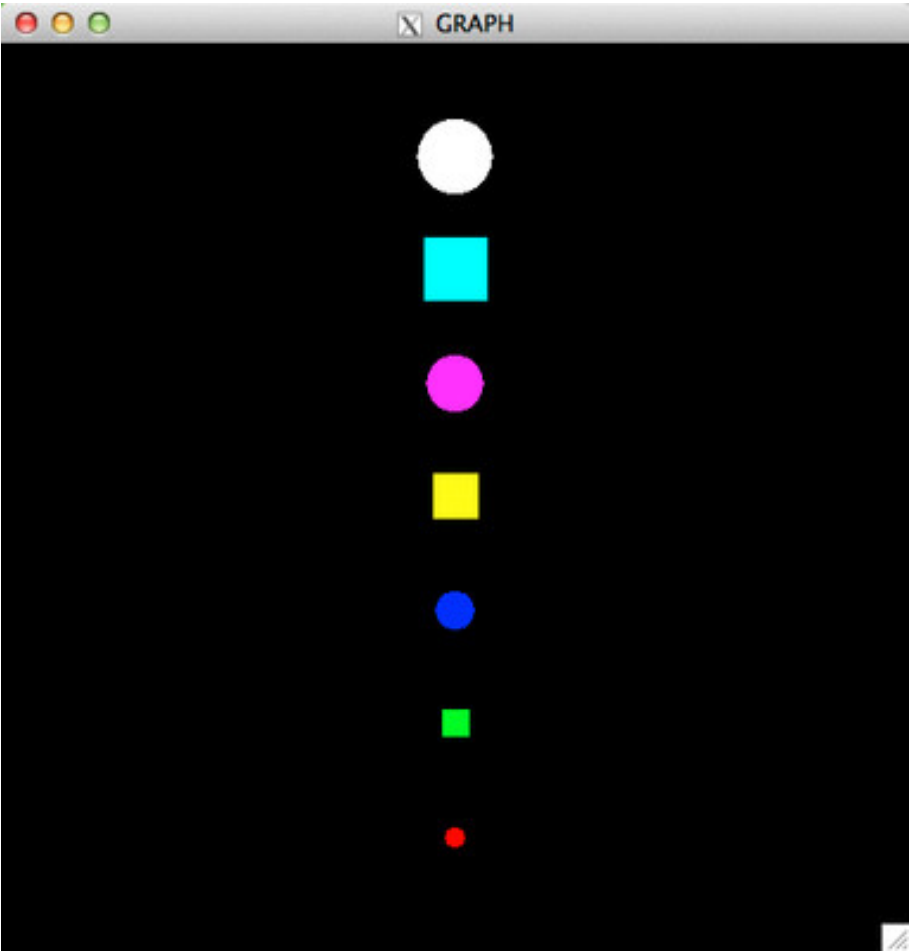
```
void g_sel_marker(  
    int id);
```

id ; マーカーの属性番号

g\_sel\_marker 関数の説明

マーカーの属性セットを選択する.





#### 5.4.7 g\_line\_color

g\_line\_color 関数

```
void g_line_color(  
    float r,float g,float b,float a);
```

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

g\_line\_color 関数の説明

線の色を変更する.

#### 5.4.8 g\_line\_width

g\_line\_width 関数

```
void g_line_width(  
    float size);
```

size ; 線の太さ

g\_line\_width 関数の説明

線の太さを変更する. (0 は 1 と同じ太さになることに注意)

#### 5.4.9 g\_line\_type

g\_line\_type 関数

```
void g_line_type(  
    int type);
```

type ; 線の種類 (0~8)

g\_line\_type 関数の説明

線の種類を変更する.

## 5.4.10 g\_def\_line

g\_def\_line 関数

```
void g_def_line(  
    int id,  
    float r, float b, float g, float a,  
    float width, int type);
```

id ; 線の属性番号

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

width ; 線の太さ

type ; 線の種類 (0~8)

g\_def\_line 関数の説明

線の属性セットを定義する.

## 5.4.11 g\_sel\_line

g\_sel\_line 関数

```
void g_sel_line(  
    int id);
```

id ; 線の属性番号

g\_sel\_line 関数の説明

線の属性セットを選択する.



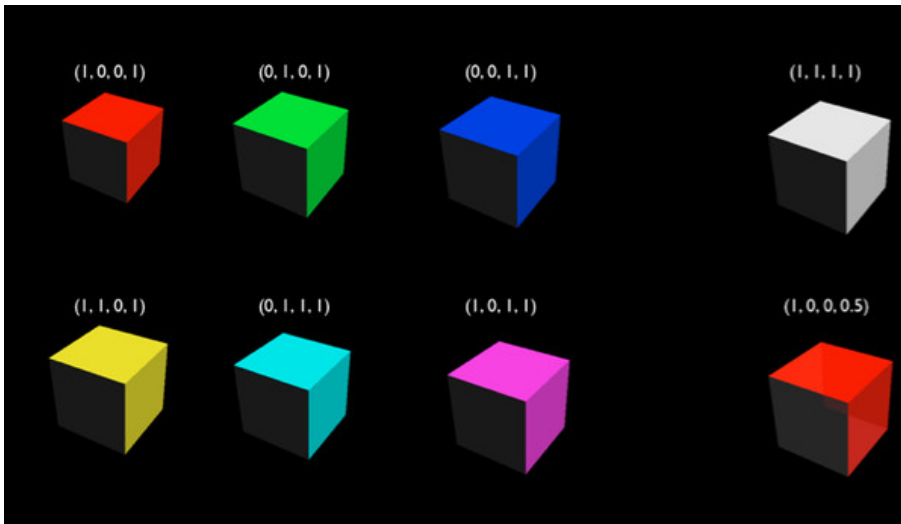
## 5.4.12 g\_area\_color\_2D,g\_area\_color\_3D

g\_area\_color\_2D,g\_area\_color\_3D 関数

```
void g_area_color_2D(  
    float r, float g, float b, float a);  
void g_area_color_3D(  
    float r, float g, float b, float a);  
  
r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )
```

g\_area\_color\_2D,g\_area\_color\_3D 関数の説明

面を塗りつぶす色を変更する.



## 5.4.13 g\_def\_area\_2D,g\_def\_area\_3D

g\_def\_area\_2D,g\_def\_area\_3D 関数

```
void g_def_area_2D(
    int id,
    float r, float b, float g, float a);
void g_def_area_3D(
    int id,
    float r, float b, float g, float a);
```

id ; 塗りつぶしの属性番号

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

g\_def\_area\_2D,g\_def\_area\_3D 関数の説明

塗りつぶしの属性セットを定義する.

## 5.4.14 g\_sel\_area\_2D,g\_sel\_area\_3D

g\_sel\_area\_2D,g\_sel\_area\_3D 関数

```
void g_sel_area_2D(
    int id);
void g_sel_area_3D(
    int id);
```

id ; 塗りつぶしの属性番号

g\_sel\_area\_2D,g\_sel\_area\_3D 関数の説明

塗りつぶしの属性セットを選択する.

#### 5.4.15 g\_text\_color

g\_text\_color 関数

```
void g_text_color(  
    float r, float g, float b, float a);
```

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

g\_text\_color 関数の説明

テキストの色を変更する.

#### 5.4.16 g\_text\_font\_core

g\_text\_font\_core 関数

```
void g_text_font_core(  
    const char *font_file);
```

const char \*font\_file ; テキストのフォントを相対パス名で指定する. テキストのフォントは ttf(True Type Font), otf(Open Type Font) などの主要な形式を指定できる.

g\_text\_font\_core 関数の説明

テキストのフォントを変更する.

#### 5.4.17 g\_text\_size

g\_text\_size 関数

```
void g_text_size(  
    float size);
```

size ; テキストのサイズを指定する.

g\_text\_size 関数の説明

テキストのサイズを変更する.

## 5.4.18 g\_def\_text, g\_def\_text\_core, g\_sel\_text

## g\_def\_text 関数

```
void g_def_text(
    int id,
    float r, float g, float b, float a,
    int font, unsigned int font_size);
```

id ; テキストの属性番号

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

font ; 使用されません

font\_size ; テキストのサイズ (自然数)

## g\_def\_text 関数の説明

テキストの属性セットを定義する. font 引数は無視される.

## g\_def\_text\_core 関数

```
void g_def_text_core(
    int id,
    float r, float g, float b, float a,
    const char *font_type, unsigned int font_size);
```

id ; テキストの属性番号

r,g,b,a ; 光の三原色+不透明度 ( $0 \leq r,g,b,a \leq 1$ )

font\_type ; フォントファイル名, または NULL

font\_size ; テキストのサイズ (自然数)

## g\_def\_text 関数の説明

テキストの属性セットを定義する. font\_type==NULL のとき, 色とサイズのみ使用される.

## g\_sel\_text 関数

```
void g_sel_text(
    int id);
```

id ; 線の属性番号

## g\_sel\_text 関数の説明

テキストの属性セットを選択する.



## 5.5 描画関数

### 5.5.1 g\_marker\_2D, g\_marker\_3D

g\_marker\_2D, g\_marker\_3D 関数

```
void g_marker_2D(  
    double x, double y);  
void g_marker_3D(  
    double x, double y, double z);
```

x,y,z ; マーカーの中心座標

g\_marker\_2D, g\_marker\_3D 関数の説明

マーカーを描画する.

### 5.5.2 g\_text\_standard

g\_text\_standard 関数

```
void g_text_standard(  
    double x, double y,  
    const char *str);
```

x,y ; テキスト左下の座標 (標準座標系)

str ; 文字列

g\_text\_standard 関数の説明

文字列を描画する。(座標指定が標準座標系であることに注意.)

### 5.5.3 g\_text\_virtual\_2D,g\_text\_virtual\_3D

g\_text\_virtual\_2D,g\_text\_virtual\_3D 関数

```
void g_text_2D_virtual(  
    double x, double y,  
    const char *str);  
void g_text_3D_virtual(  
    double x, double y, double z,  
    const char *str);
```

x,y,z ; テキスト左下の座標 (仮想座標系)

str ; 文字列

g\_text\_virtual\_2D,g\_text\_virtual\_3D 関数の説明

文字列を描画する。(座標指定が仮想座標系であることに注意.)

## 5.5.4 g\_move\_2D,g\_move\_3D

g\_move\_2D,g\_move\_3D 関数

```
void g_move_2D(  
    double x, double y);  
void g_move_3D(  
    double x, double y, double z);
```

x,y,z ; 線の始点の座標

g\_move\_2D,g\_move\_3D 関数の説明

線の始点を指定する.

## 5.5.5 g\_plot\_2D,g\_plot\_3D

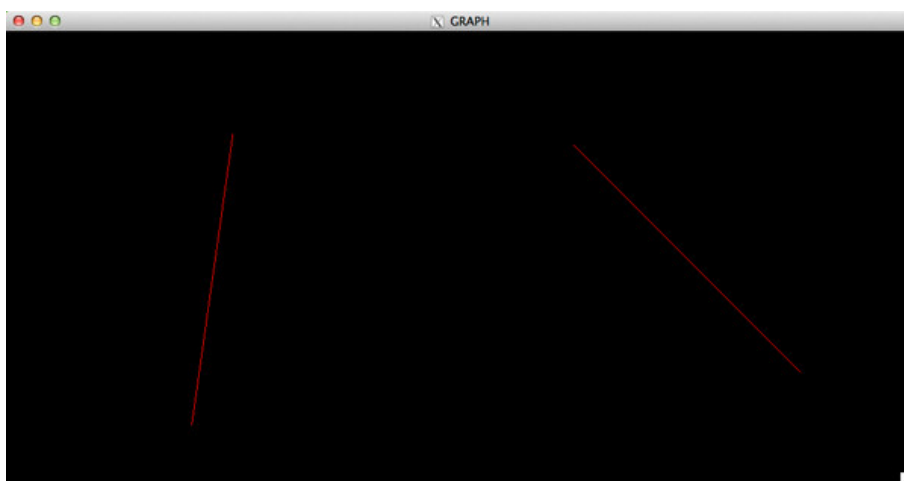
g\_plot\_2D,g\_plot\_3D 関数

```
void g_plot_2D(  
    double x, double y);  
void g_plot_3D(  
    double x, double y, double z);
```

x,y,z ; 線の始点の座標

g\_plot\_2D,g\_plot\_3D 関数の説明

線の終点を指定する.



### 5.5.6 g\_box\_2D

g\_box\_2D 関数

```
void g_box_2D(  
    double x, double y,  
    double width, double height,  
    G_WIREFILL WireFill);
```

x,y ; 重心の座標

width,height ; 幅と高さ

WireFill ; 塗りつぶすか (1), 塗りつぶさないか (0)

g\_box\_2D 関数の説明

長方形を描画する.

### 5.5.7 g\_box\_3D

g\_box\_3D 関数

```
void g_box_3D(  
    double x, double y, double z,  
    double width, double height, double depth);
```

x,y,z ; 重心の座標

width,height,depth ; 幅と高さ と 奥行き

g\_box\_3D 関数の説明

直方体を描画する.

### 5.5.8 g\_box\_3D\_core

g\_box\_3D\_core 関数

```
void g_box_3D(  
    double x, double y, double z,  
    double width, double height, double depth,  
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

x,y,z ; 重心の座標

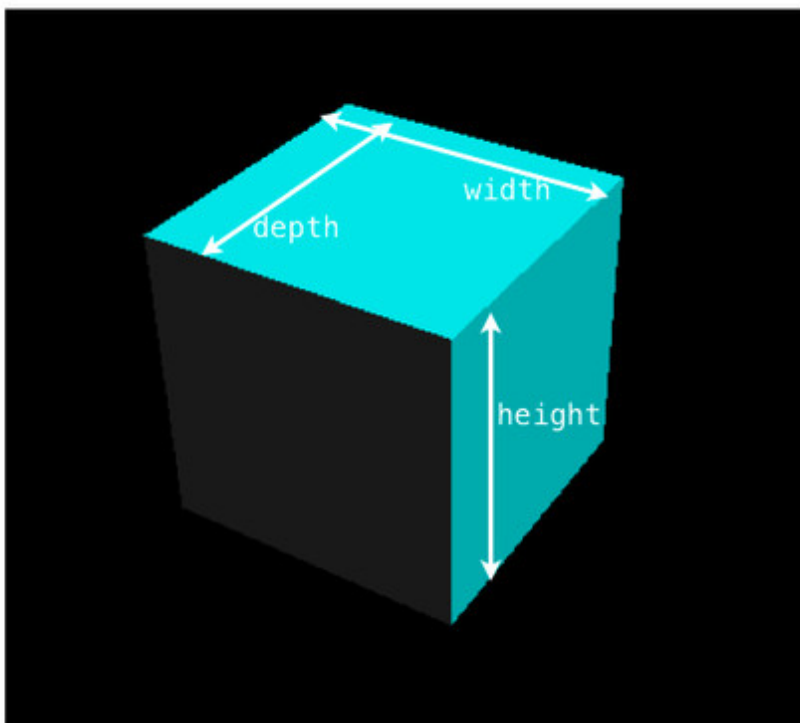
width,height,depth ; 幅と高さとお行き

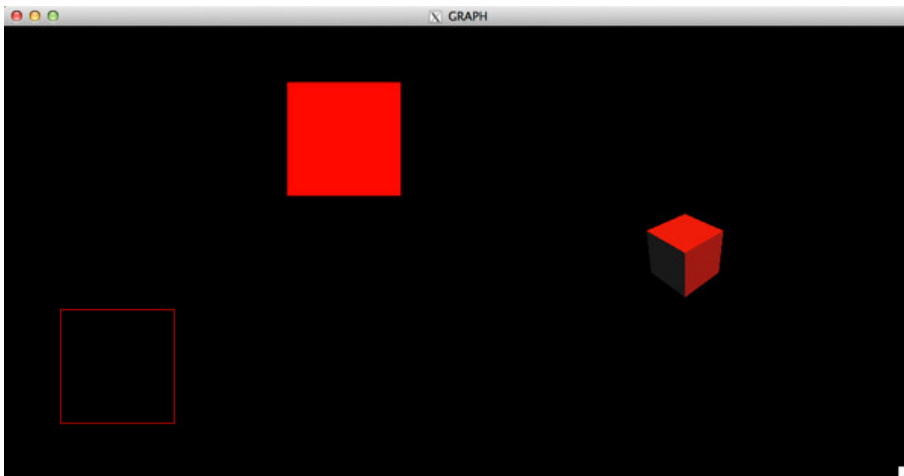
DivideLevel ; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_box\_3D\_core 関数の説明

直方体を描画する. (より細かい設定が可能)





### 5.5.9 g\_sphere\_3D

#### g\_sphere\_3D 関数

```
void g_sphere_3D(  
    double x, double y, double z,  
    double radius);
```

x,y,z ; 重心の座標

radius ; 半径

#### g\_sphere\_3D 関数の説明

球を描画する.

Ver 3.0 以降: この関数を小さな球を大量に表示する目的には使用しないでください. 代わりに球マーカーを使用してください.

## 5.5.10 g\_sphere\_3D\_core

g\_sphere\_3D\_core 関数

```
void g_sphere_3D_core(
    double x, double y, double z,
    double radius,
    int FaceNumberLevel, int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

x,y,z ; 重心の座標

radius ; 半径

FaceNumberLevel ; 球面の分割レベル

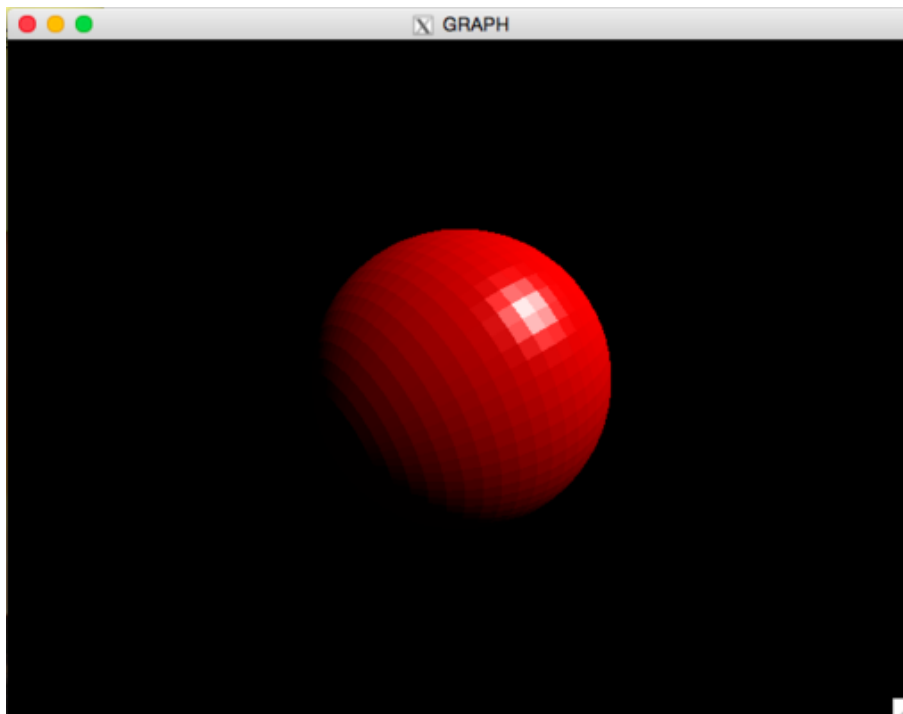
DivideLevel ; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースケルトン, G\_FILL:塗りつぶす

g\_sphere\_3D\_core 関数の説明

球を描画する。(より細かい設定が可能)

Ver 3.0 以降: この関数を小さな球を大量に表示する目的には使用しないでください。代わりに球マーカーを使用してください。





### 5.5.11 g\_ellipse\_3D

g\_ellipse\_3D 関数

```
void g_ellipse_3D(  
    double x, double y, double z,  
    double Sx, double Sy, double Sz,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z);
```

x,y,z ; 重心の座標

Sx,Sy,Sz ; x,y,z 方向へのスケーリング率

direction ; 向き

g\_ellipse\_3D 関数の説明

楕円球を描画する.

## 5.5.12 g\_ellipse\_3D\_core

g\_ellipse\_3D\_core 関数

```
void g_ellipse_3D_core(
    double x, double y, double z,
    double Sx, double Sy, double Sz,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    int FaceNumberLevel, int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

x,y,z ; 重心の座標

Sx,Sy,Sz ; x,y,z 方向へのスケーリング率

direction ; 向き

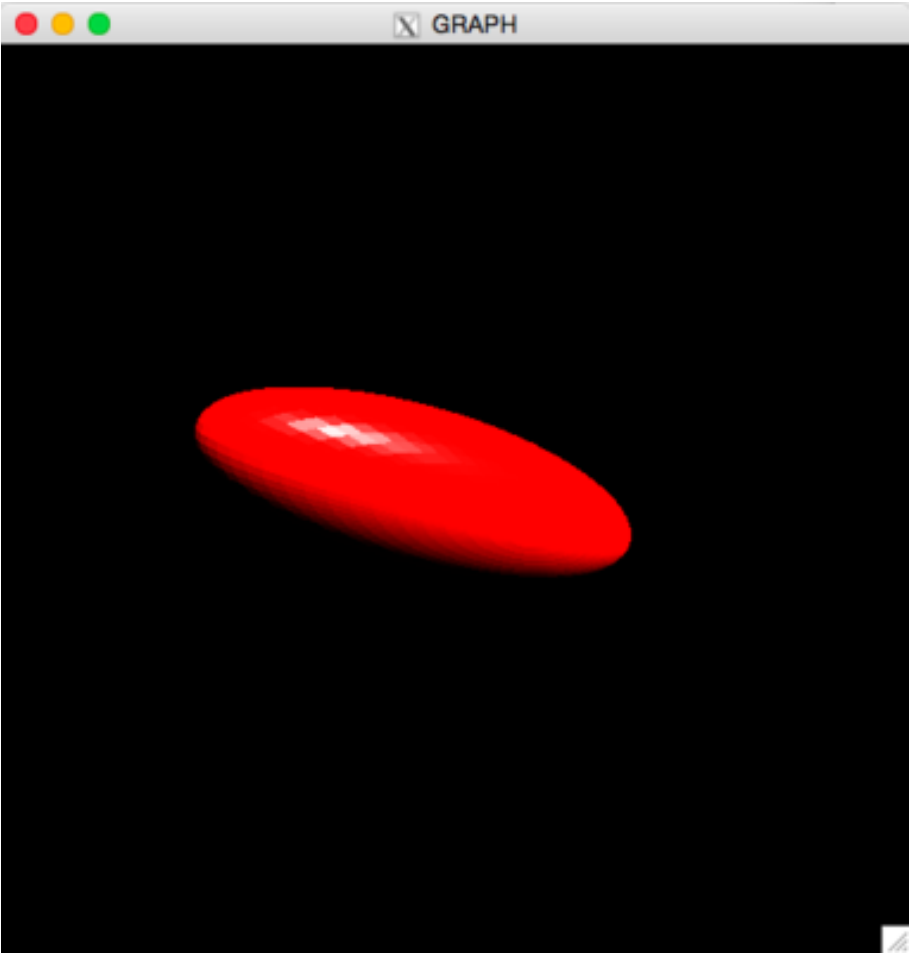
FaceNumberLevel ; 球面の分割レベル

DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースケルトン, G\_FILL:塗りつぶす

g\_ellipse\_3D\_core 関数の説明

楕円球を描画する。(より細かい設定が可能)



## 5.5.13 g\_prism\_3D

g\_prism\_3D 関数

```
void g_prism_3D(  
    double center_x, double center_y, double center_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double radius, double height, double psi, int N);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

height ; 高さ

psi ; direction に対する回転角

N ; 側面の数

g\_prism\_3D 関数の説明

角柱を描画する.

## 5.5.14 g\_prism\_3D\_core

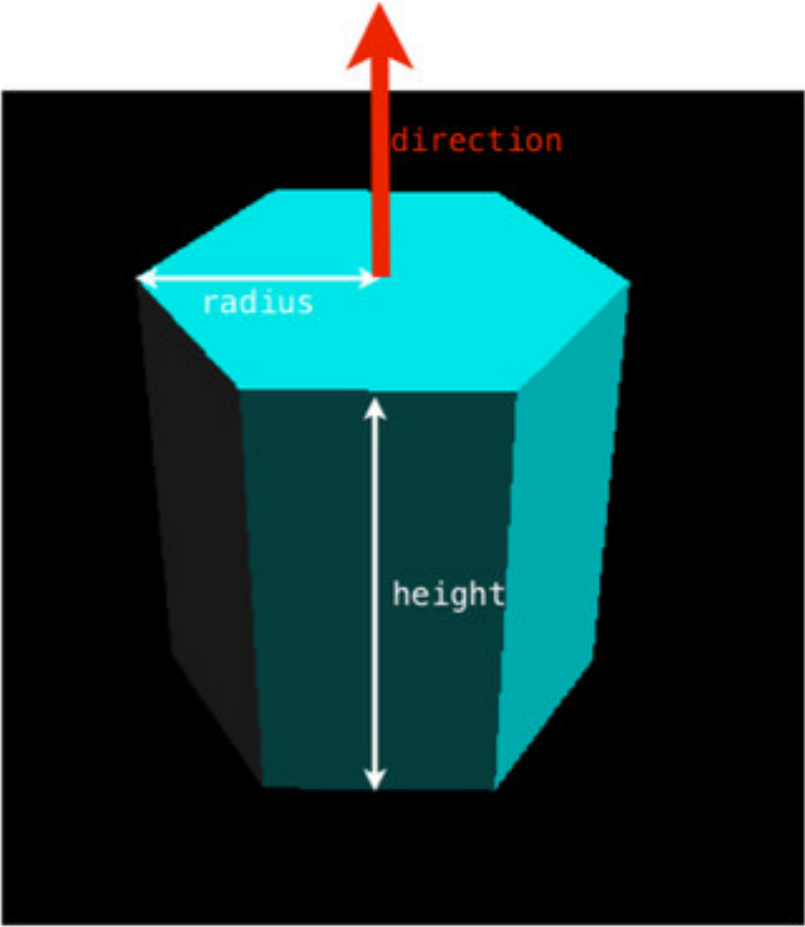
g\_prism\_3D\_core 関数

```
void g_prism_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double height, double psi, int N,
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 重心の座標  
 direction ; 向き  
 radius ; 半径  
 height ; 高さ  
 psi ; direction に対する回転角  
 N ; 側面の数  
 DivideLevel ; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)  
 WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_prism\_3D\_core 関数の説明

角柱を描画する。(より細かい設定が可能)



## 5.5.15 g\_cylinder\_3D

g\_cylinder\_3D 関数

```
void g_cylinder_3D(  
    double center_x, double center_y, double center_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double radius, double height, double psi);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

height ; 高さ

psi ; direction に対する回転角

g\_cylinder\_3D 関数の説明

円柱を描画する.

## 5.5.16 g\_cylinder\_3D\_core

g\_cylinder\_3D\_core 関数

```
void g_cylinder_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double height, double psi,
    int N, int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

height ; 高さ

psi ; direction に対する回転角

N ; 側面の数

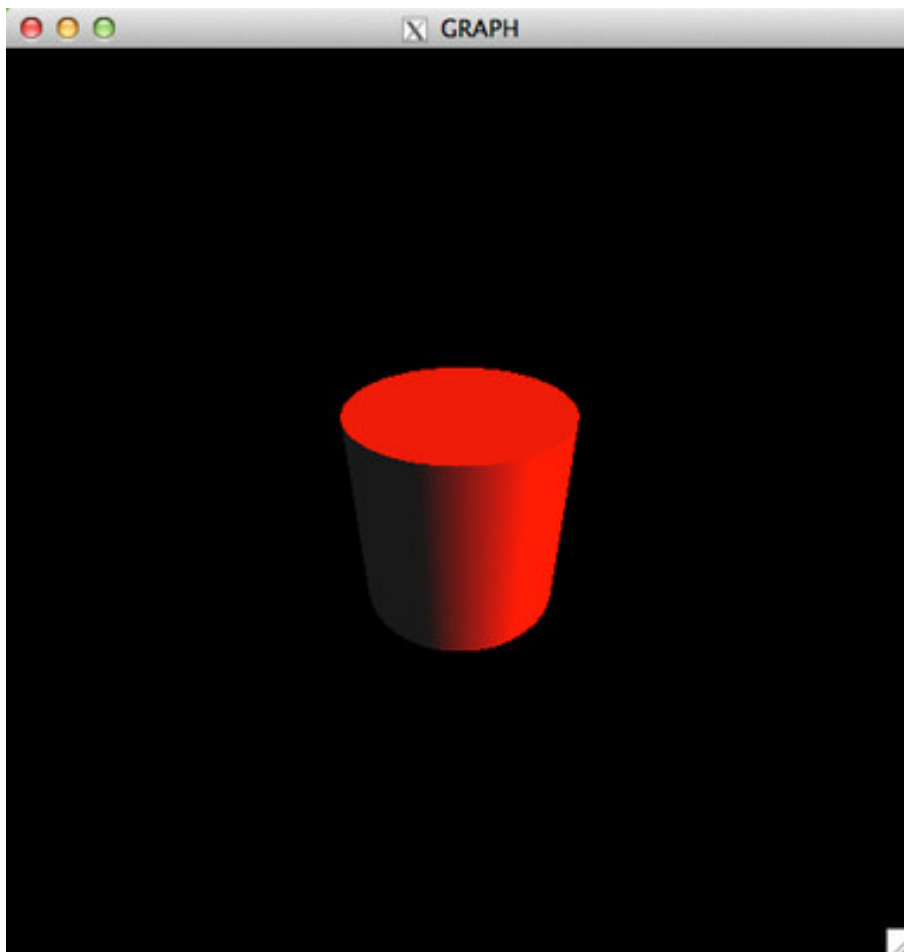
DivideLevel ; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_cylinder\_3D\_core 関数の説明

円柱を描画する。(より細かい設定が可能)





## 5.5.17 g\_cone\_3D

g\_cone\_3D 関数

```
void g_cone_3D(  
    double center_x, double center_y, double center_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double radius, double head_size  
    G_BOOL Wire, G_BOOL Fill);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

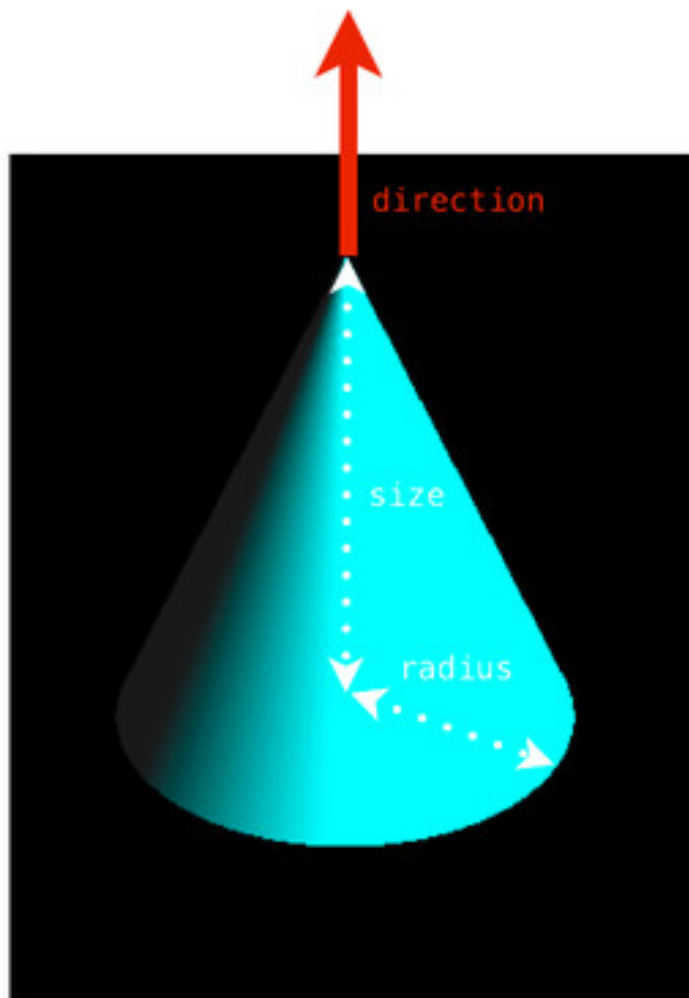
head\_size ; 高さ

Wire ; G\_YES:線を描く, G\_NO:線を描かない

Fill ; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

g\_cone\_3D 関数の説明

円錐を描画する.



## 5.5.18 g\_cone\_3D\_core

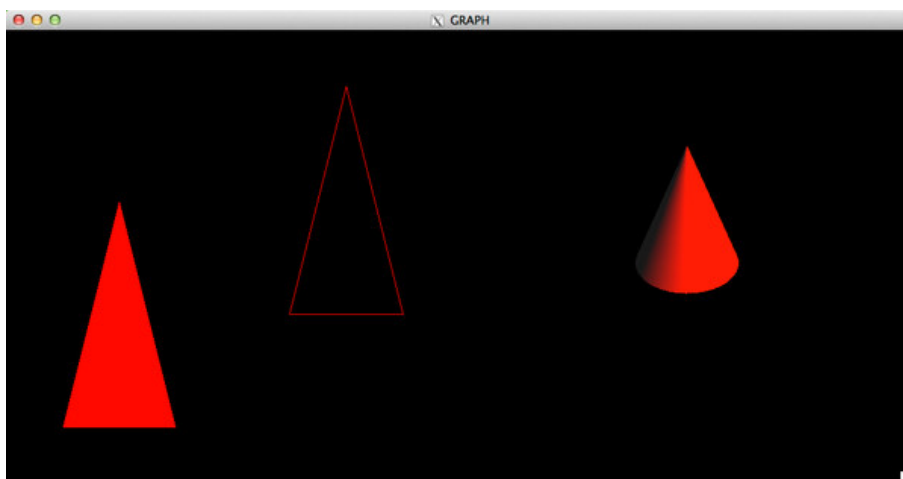
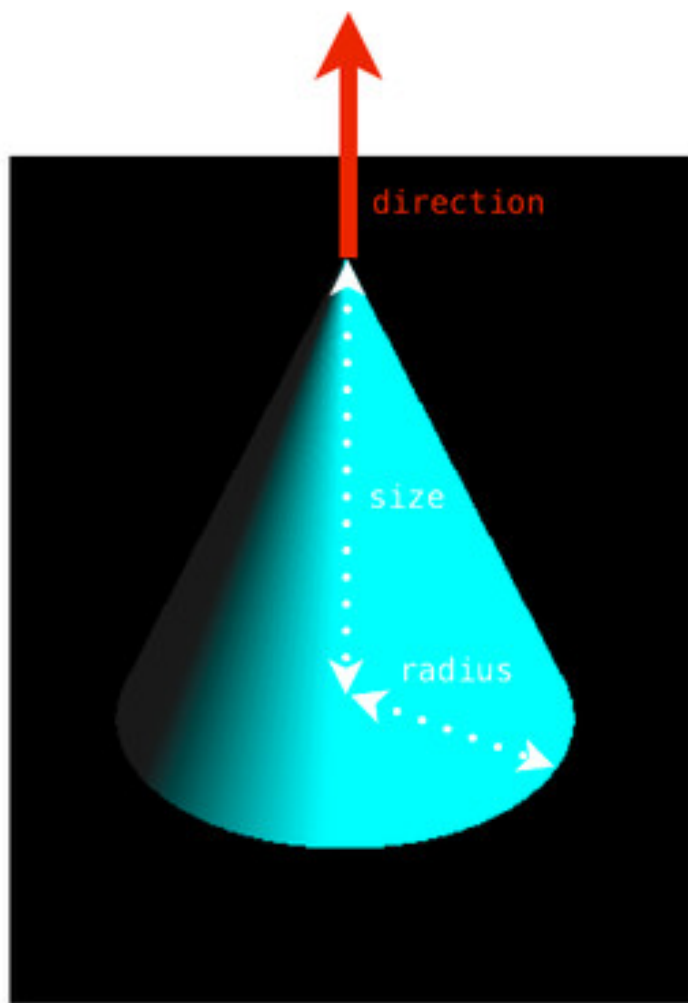
g\_cone\_3D\_core 関数

```
void g_cone_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double head_size,
    int FaceNumberLevel_X, int FaceNumberLevel_Y,
    int DivideLevel,
    G_BOOL Wire, G_BOOL Fill);
```

center ; 重心の座標  
direction ; 向き  
radius ; 半径  
head\_size ; 高さ  
FaceNumberLevel ; 球面の分割レベル  
DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)  
Wire ; G\_YES:線を描く, G\_NO:線を描かない  
Fill ; G\_YES:塗りつぶす, G\_NO:塗りつぶさない

g\_cone\_3D\_core 関数の説明

円錐を描画する。(より細かい設定が可能)



### 5.5.19 g\_pyramid\_3D

#### g\_pyramid\_3D 関数

```
void g_pyramid_3D(  
    double center_x, double center_y, double center_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double radius, double head_size, double psi, int N);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

head\_size ; 高さ

psi ; direction に対する回転角

N ; 側面の数

#### g\_pyramid\_3D 関数の説明

角錐を描画する.

## 5.5.20 g\_pyramid\_3D\_core

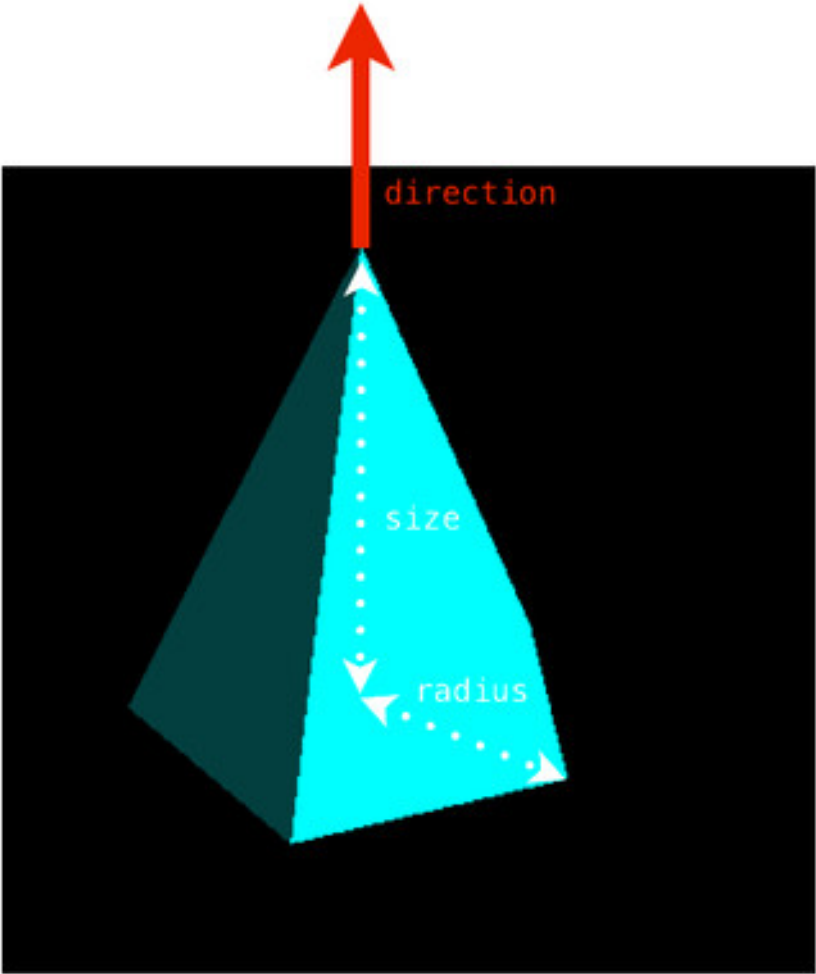
g\_pyramid\_3D\_core 関数

```
void g_pyramid_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double head_size, double psi, int N,
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 重心の座標  
 direction ; 向き  
 radius ; 半径  
 head\_size ; 高さ  
 psi ; direction に対する回転角  
 N ; 側面の数  
 DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)  
 WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_pyramid\_3D\_core 関数の説明

角錐を描画する。(より細かい設定が可能)





## 5.5.21 g\_arrow\_2D

g\_arrow\_2D 関数

```
void g_arrow_2D(  
    double base_x, double base_y  
    double direction_x, double direction_y  
    double arrow_size, double head_size, int type);
```

base ; 根元の座標

direction ; 向き

arrow\_size ; 全体の長さ

head\_size ; 傘の部分の長さ

type ; 矢印の種類 (0~2)

g\_arrow\_2D 関数の説明

矢印を描画する.

## 5.5.22 g\_arrow\_3D

g\_arrow\_3D 関数

```
void g_arrow_3D(  
    double base_x, double base_y, double base_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double arrow_size, double head_size);
```

base ; 根元の座標

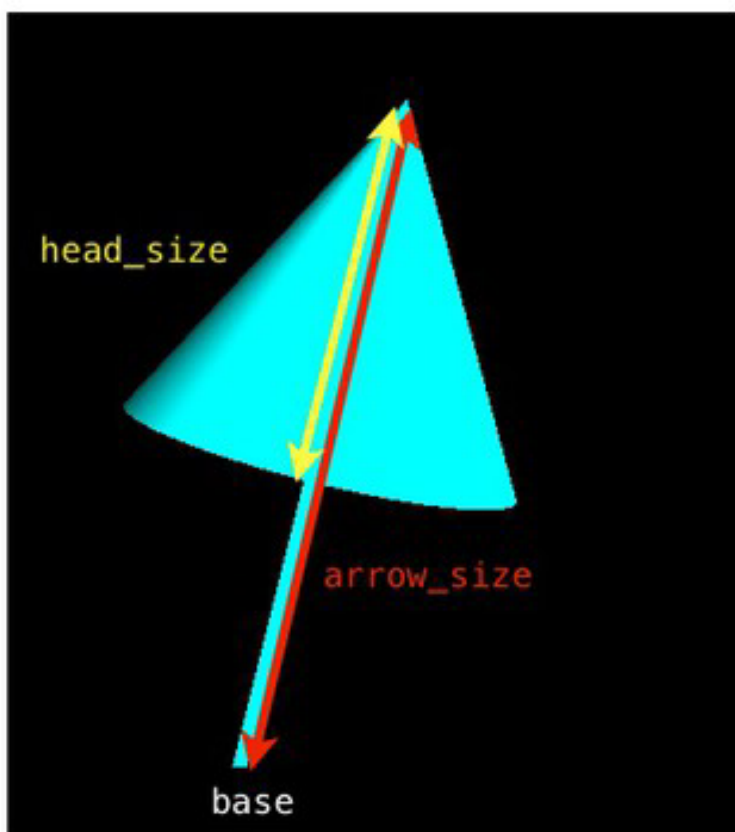
direction ; 向き

arrow\_size ; 全体の長さ

head\_size ; 傘の部分の長さ

g\_arrow\_3D 関数の説明

矢印を描画する.



## 5.5.23 g\_arrow\_3D\_core

g\_arrow\_3D\_core 関数

```
void g_arrow_3D_core(
    double base_x, double base_y, double base_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double arrow_size, double head_size,
    int FaceNumberLevel_X, int FaceNumberLevel_Y,
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

base ; 根元の座標

direction ; 向き

arrow\_size ; 全体の長さ

head\_size ; 傘の部分の長さ

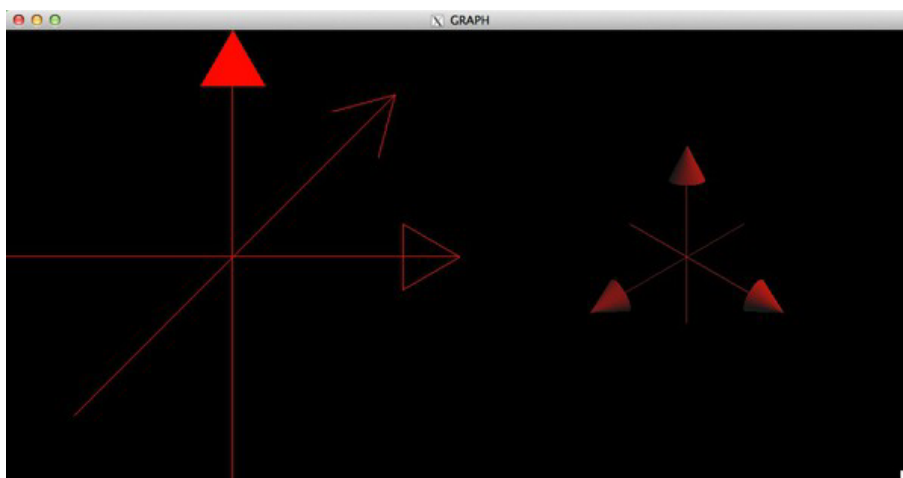
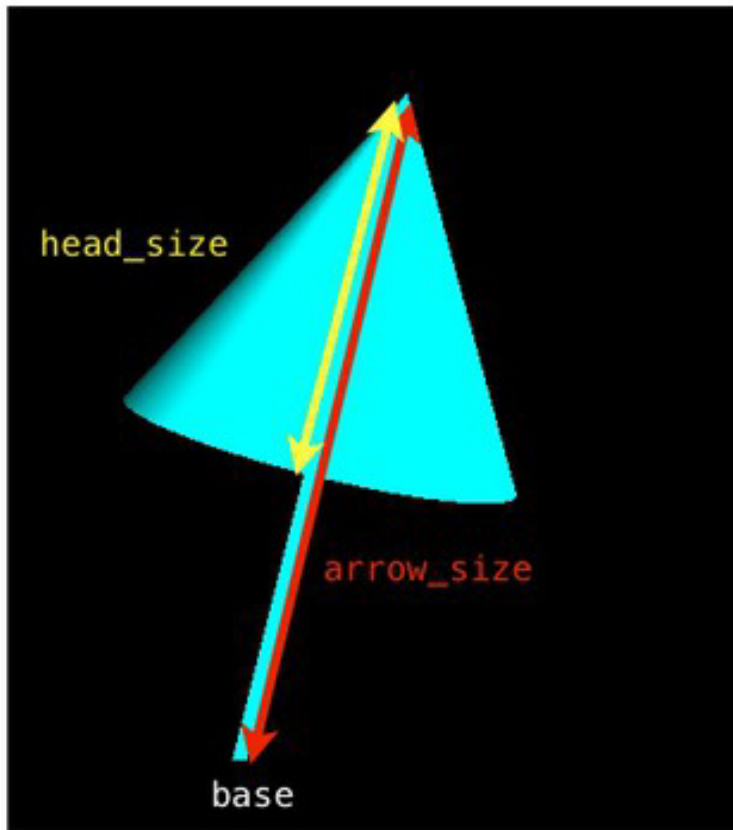
FaceNumberLevel ; 球面の分割レベル

DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_arrow\_3D\_core 関数の説明

矢印を描画する。(より細かい設定が可能)



## 5.5.24 g\_triangle\_2D

g\_triangle\_2D 関数

```
void g_triangle_2D(  
    double x0, double y0,  
    double x1, double y1,  
    double x2, double y2,  
    G_WIREFILL WireFill);
```

x,y ; 各頂点の座標

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_triangle\_2D 関数の説明

三角形を描画する.

## 5.5.25 g\_triangle\_3D

g\_triangle\_3D 関数

```
void g_triangle_3D(  
    double x0, double y0, double z0,  
    double x1, double y1, double z1,  
    double x2, double y2, double z2,  
    G_WIREFILL WireFill);
```

x,y ; 各頂点の座標

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_triangle\_3D 関数の説明

三角形を描画する。(頂点の指定順によって表裏が変わることに注意.)

## 5.5.26 g\_triangle\_3D\_core

g\_triangle\_3D\_core 関数

```
void g_triangle_3D_core(
    double x0, double y0, double z0,
    double x1, double y1, double z1,
    double x2, double y2, double z2,
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

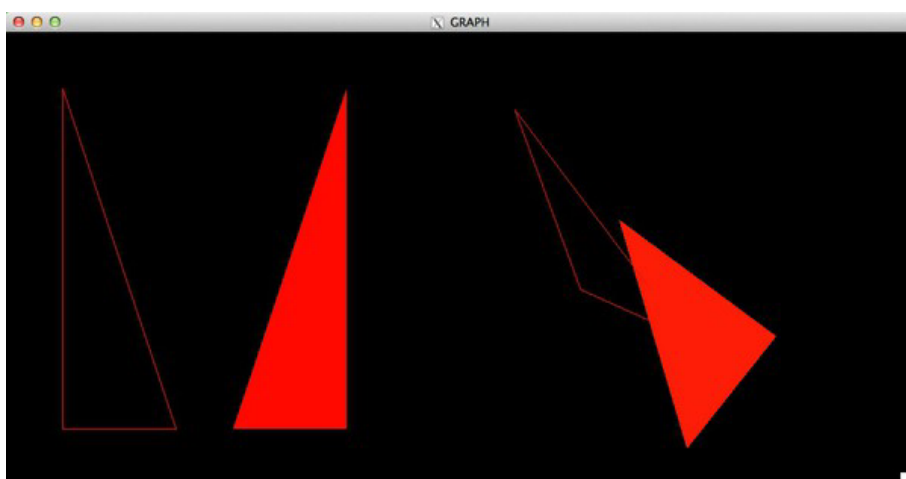
x,y ; 各頂点の座標

DivideLevel ; 面の三角形分割レベル (4<sup>DivideLevel</sup> 倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_triangle\_3D\_core 関数の説明

三角形を描画する。(頂点の指定順によって表裏が変わることに注意.)



## 5.5.27 g\_fan\_2D

g\_fan\_2D 関数

```
void g_fan_2D(  
    double center_x, double center_y,  
    double direction_x, double direction_y,  
    double radius, double angle,  
    G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 中心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

angle ; 扇の中心角

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤーフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_fan\_2D 関数の説明

扇形を描画する.



## 5.5.28 g\_fan\_3D

g\_fan\_3D 関数

```
void g_fan_3D(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double angle, double psi,
    G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 中心の座標

direction ; 向き

radius ; 半径

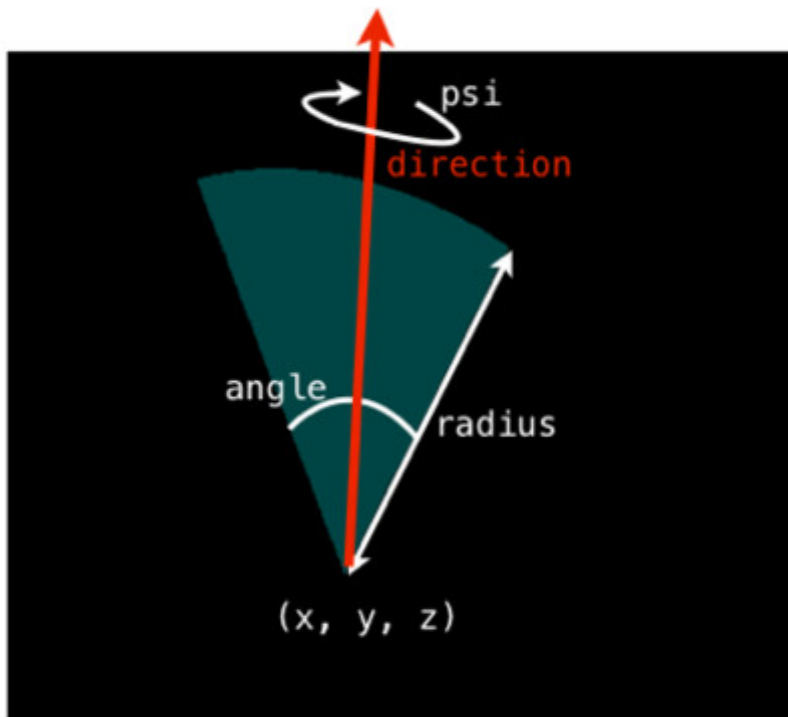
angle ; 扇の中心角

psi ; direction に対する回転角

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_fan\_3D 関数の説明

扇形を描画する.



## 5.5.29 g\_fan\_3D\_core

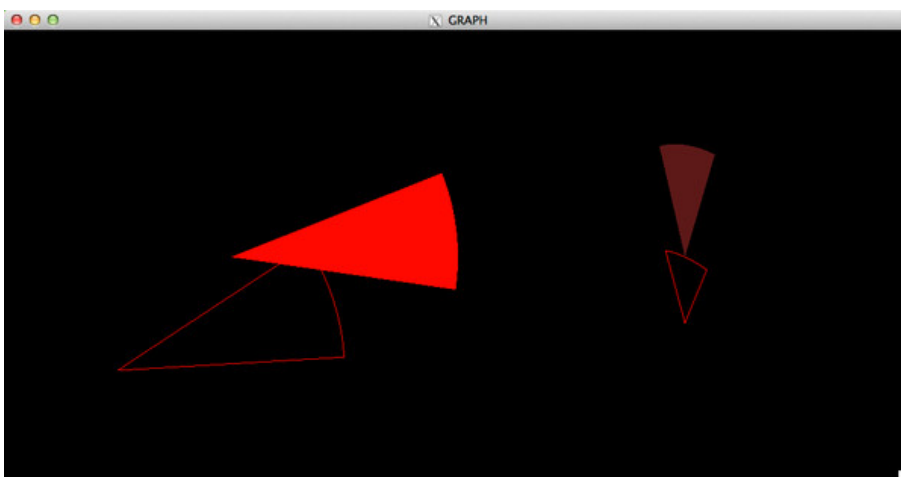
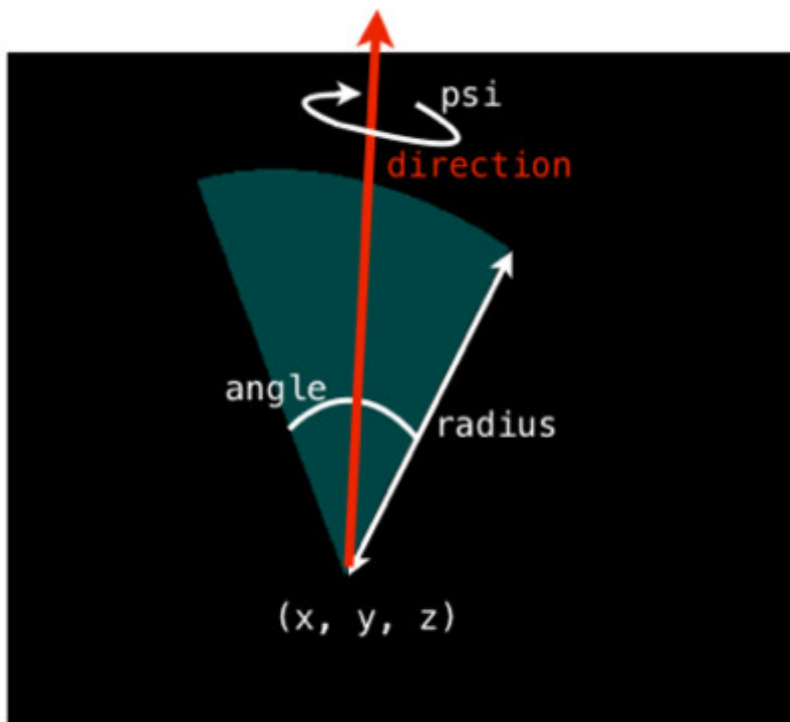
g\_fan\_3D\_core 関数

```
void g_fan_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double radius, double angle, double psi,
    int FaceNumberLevel, int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 中心の座標  
 direction ; 向き  
 radius ; 半径  
 angle ; 扇の中心角  
 psi ; direction に対する回転角  
 FaceNumberLevel ; 球面の分割レベル  
 DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)  
 WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_fan\_3D\_core 関数の説明

扇形を描画する.



### 5.5.30 g\_circle\_2D

g\_circle\_2D 関数

```
void g_circle_2D(  
    double center_x, double center_y,  
    double radius,G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 中心の座標

radius ; 半径

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースタイル, G\_FILL:塗りつぶす

g\_circle\_2D 関数の説明

円を描画する.

## 5.5.31 g\_circle\_3D

g\_circle\_3D 関数

```
void g_circle_3D(  
    double center_x, double center_y,  
    double radius, double theta, double phi);
```

center ; 中心の座標

radius ; 半径

psi ; 半径

theta ; 半径

g\_circle\_3D 関数の説明

円盤を描画する.

## 5.5.32 g\_circle\_3D\_core

g\_circle\_3D\_core 関数

```
void g_circle_3D_core(
    double center_x, double center_y,
    double radius, double theta, double phi,
    int N, int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 中心の座標

radius ; 半径

psi ; 半径

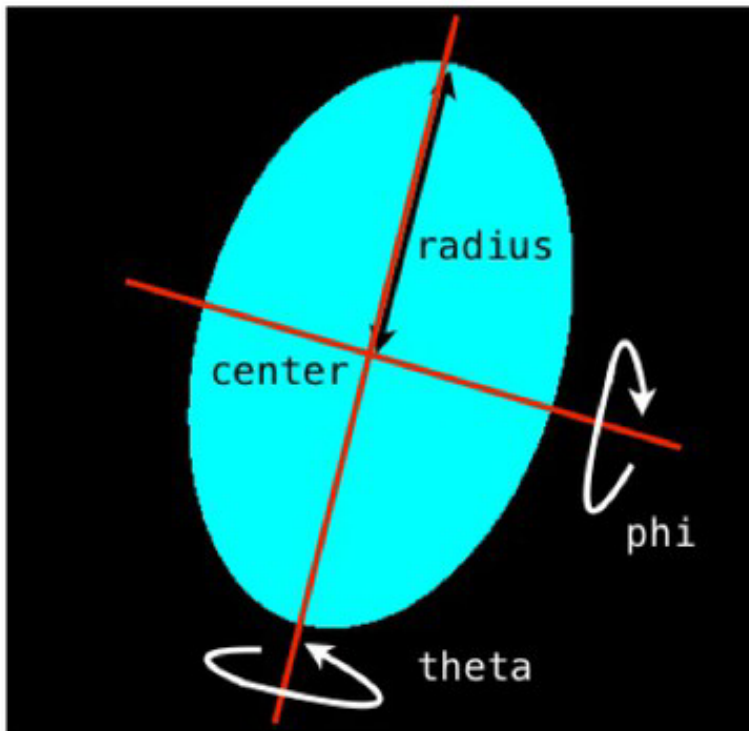
theta ; 半径

N ; 辺の数 DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_circle\_3D\_core 関数の説明

円盤を描画する.





## 5.5.33 g\_polygon\_2D

g\_polygon\_2D 関数

```
void g_polygon_2D(  
    double *xx, double *yy,  
    int n,G_WIREFILL WireFill);
```

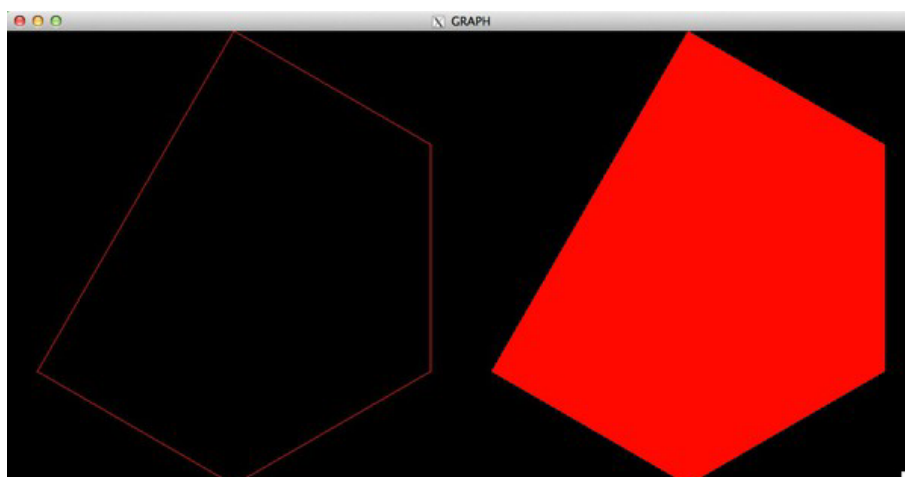
xx,yy ; 頂点データを格納した一次元配列

n ; 配列の数

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_polygon\_2D 関数の説明

多角形を描画する.





### 5.5.34 g\_polyline\_2D

g\_polyline\_2D 関数

```
void g_polyline_2D(  
    double *xx, double *yy,  
    int n);
```

xx,yy ; 頂点データを格納した一次元配列

n ; 配列の数

g\_polyline\_2D 関数の説明

与えられた点列を線分で連続的に結んだものを描画する.

## 5.5.35 g\_polyline\_3D

g\_polyline\_3D 関数

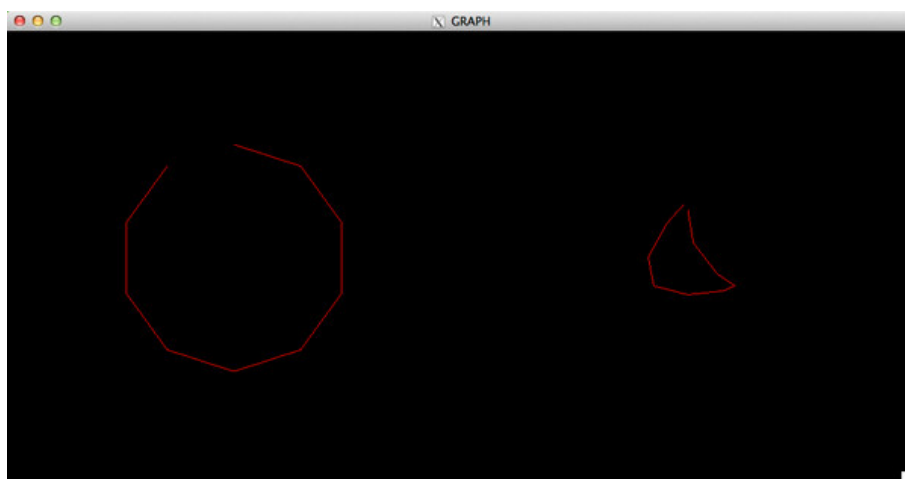
```
void g_polyline_3D(  
    double *xx, double *yy, double *zz,  
    int n);
```

xx,yy,zz ; 頂点データを格納した一次元配列

n ; 配列の数

g\_polyline\_3D 関数の説明

与えられた点列を線分で連続的に結んだものを描画する.



## 5.5.36 g\_rectangle\_3D

g\_rectangle\_3D 関数

```
void g_rectangle_3D(  
    double center_x, double center_y, double center_z,  
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,  
    double width, double depth, double psi);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

width,height,depth ; 幅, 高さ, 奥行き

g\_rectangle\_3D 関数の説明

長方形を描画する.

## 5.5.37 g\_rectangle\_3D\_core

g\_rectangle\_3D\_core 関数

```
void g_rectangle_3D_core(
    double center_x, double center_y, double center_z,
    double direction_x, double direction_y, double direction_z,
    double width, double depth, double psi,
    int DivideLevel, G_WIREFILL WireFill);
```

center ; 重心の座標

direction ; 向き

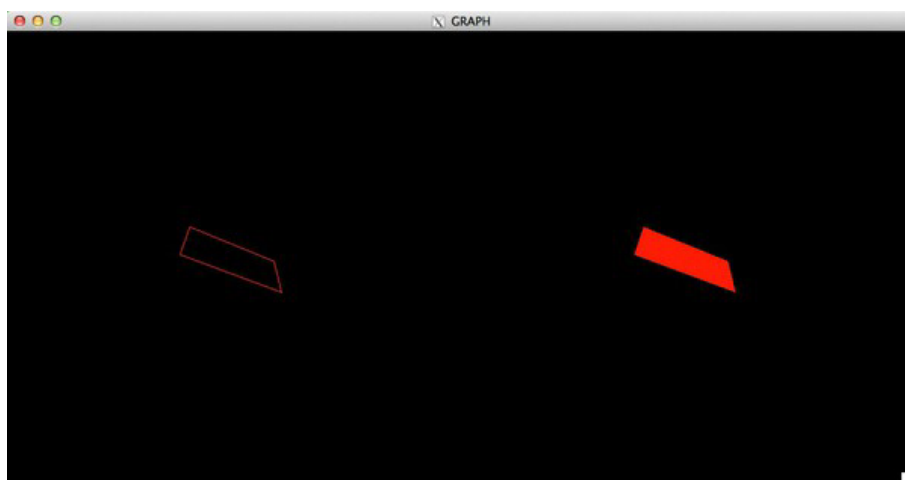
width,height,depth ; 幅, 高さ, 奥行き

DivideLevel ; 面の三角形分割レベル ( $4^{\text{DivideLevel}}$  倍ずつ三角形の分割数が増える)

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤースケッチ, G\_FILL:塗りつぶす

g\_rectangle\_3D\_core 関数の説明

長方形を描画する.



## 5.5.38 g\_data\_plot\_2D

g\_data\_plot\_2D 関数

```
void g_data_plot_2D(  
    double x0, double x1,  
    double y0, double y1,  
    int number_x,  
    double u[number_x]);
```

x,y ; 描画範囲の指定

number ; 配列 u のサイズ

u ; データの格納された 1 次元配列

g\_data\_plot\_2D 関数の説明

1 次元配列 u のデータをプロットする.

## 5.5.39 g\_data\_plot\_3D

g\_data\_plot\_3D 関数

```
void g_data_plot_3D(  
    double x0, double x1,  
    double y0, double y1,  
    double z0, double z1,  
    int number_x, int number_y,  
    double u[number_x][number_y]);
```

x,y,z ; 描画範囲の指定

number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 2次元配列もしくは1次元配列を2次元配列化\*した配列

g\_data\_plot\_3D 関数の説明

2次元配列 u のデータをプロットする。(2次元配列化\*に関しては前章をお読みください.  
c++ では使用不可であることに注意.)

## 5.5.40 g\_data\_plot\_f\_3D

g\_data\_plot\_f\_3D 関数

```
void g_data_plot_f_3D(
    double x0, double x1,
    double y0, double y1,
    double z0, double z1,
    int number_x, int number_y,
    double *u);
```

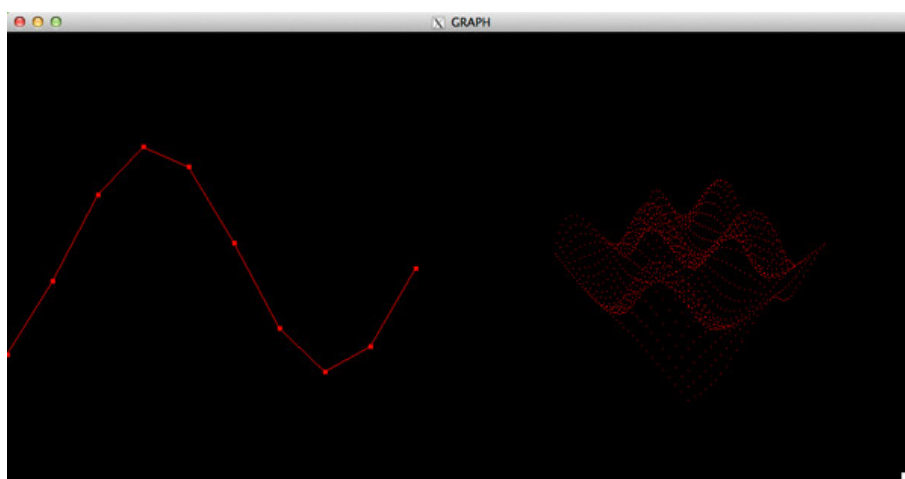
x,y,z ; 描画範囲の指定

number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 1次元配列を2次元配列化\*した配列

g\_data\_plot\_f\_3D 関数の説明

1次元配列 u のデータをプロットする。(2次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



## 5.6 上位関数

### 5.6.1 g\_contln\_2D

g\_contln\_2D 関数

```
void g_contln_2D(
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    int N_x, int N_y,
    double data2D[N_x][N_y],
    double level);
```

x,y ; 描画範囲の指定

N ; 配列 u の各方向のサイズ

data2D ; データの格納された 2 次元配列もしくは 1 次元配列を 2 次元配列化\*した配列

level ; 等高線を引きたい値.

g\_contln\_2D 関数の説明

2 次元配列 u に対して, 値 level に等高線を描画する. (2 次元配列化\*に関しては前章をお読みください. c++ では使用不可であることに注意.)



## 5.6.2 g\_contln\_f\_2D

g\_contln\_f\_2D 関数

```
void g_contln_f_2D(
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    int N_x, int N_y,
    double *data2D,
    double level);
```

x,y ; 描画範囲の指定

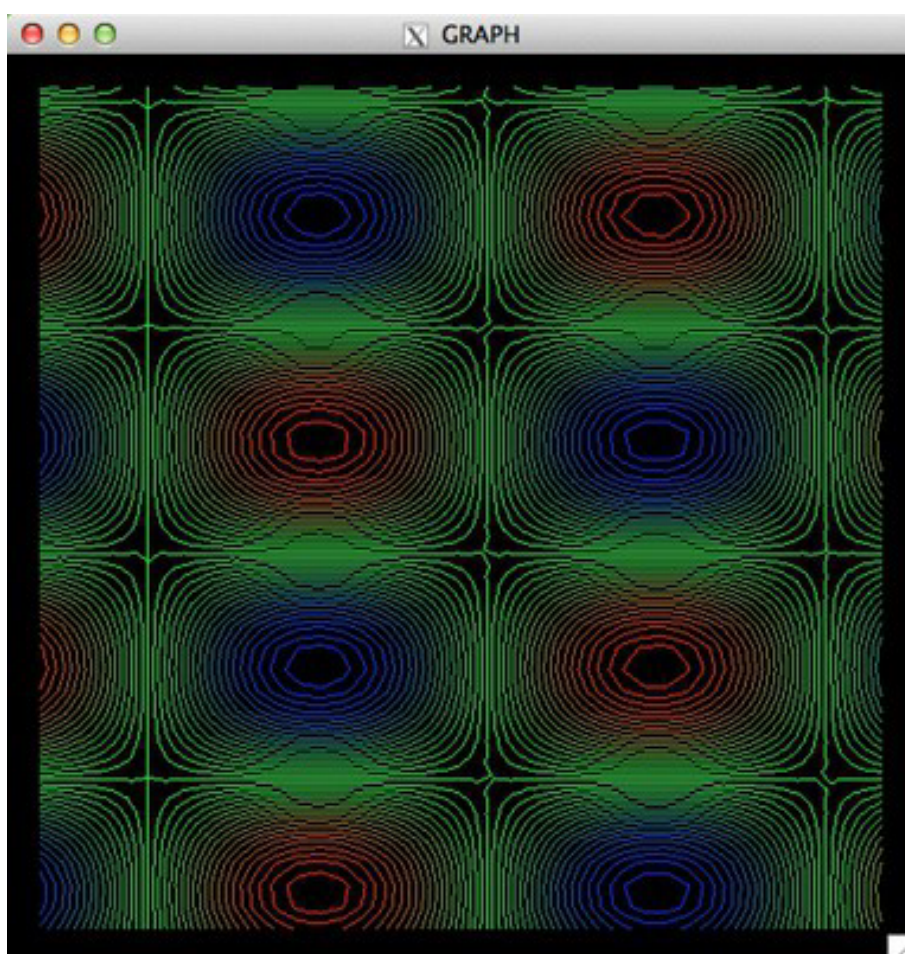
N ; 配列 u の各方向のサイズ

data2D ; データの格納された, 1次元配列を2次元配列化\*した配列

level ; 等高線を引きたい値.

g\_contln\_f\_2D 関数の説明

1次元配列 u に対して, 値 level に等高線を描画する. (2次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



## 5.6.3 g\_bird\_view\_3D

## g\_bird\_view\_3D 関数

```
void g_bird_view_3D(
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    int number_x, int number_y,
    double u[number_x][number_y],
    G_WIREFILL WireFill);
```

x,y,z ; 描画範囲の指定

number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 2次元配列もしくは1次元配列を2次元配列化\*した配列

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤーフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

## g\_bird\_view\_3D 関数の説明

2次元配列 u に対して鳥瞰図を描画する. y\_top=y\_bottom とすると y 方向のスケーリングをせず, 値をそのまま反映する. (2次元配列化\*に関しては前章をお読みください. c++ では使用不可であることに注意.)

## 5.6.4 g\_bird\_view\_f\_3D

g\_bird\_view\_f\_3D 関数

```
void g_bird_view_f_3D(
    double x_left, double x_right,
    double y_bottom, double y_top,
    int number_x, int number_y,
    double *u,
    G_WIREFILL WireFill);
```

x,y,z ; 描画範囲の指定

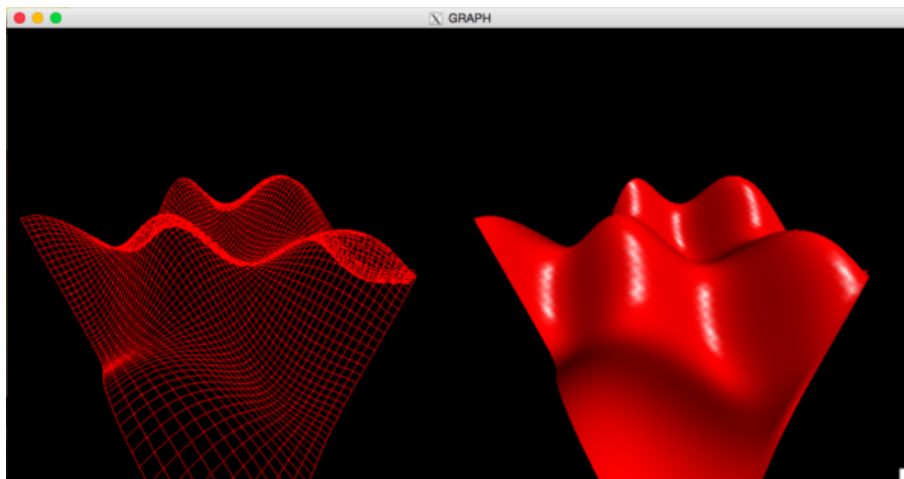
number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 1次元配列を2次元配列化\*した配列

WireFill ; G\_WIRE:ワイヤーフレーム, G\_FILL:塗りつぶす

g\_bird\_view\_f\_3D 関数の説明

1次元配列 u に対して鳥瞰図を描画する.  $y_{top}=y_{bottom}$  とすると y 方向のスケーリングをせず, 値をそのまま反映する. (2次元配列化\*に関しては前章をお読みください.)



## 5.6.5 g\_isosurface\_3D

g\_isosurface\_3D 関数

```
void g_isosurface_3D(
    double x0, double x1,
    double y0, double y1,
    double z0, double z1,
    int number_x, int number_y, int number_z,
    double u[number_x][number_y][number_z],
    double height);
```

x,y,z ; 描画範囲の指定

number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 3次元配列もしくは1次元配列を3次元配列化\*した配列

height ; 等値面を描きたい値

g\_isosurface\_3D 関数の説明

3次元配列 u に対して与えられた高さ height の位置でマーチングテトラヘドンを法を用いて、等値面を描画する。(フラットシェーディングのみサポートしている。フラットシェーディングはメモリ使用量が増大するため機能しない。3次元配列化\*に関しては前章をお読みください。c++ では使用不可であることを注意。)

## 5.6.6 g\_isosurface\_f\_3D

g\_isosurface\_f\_3D 関数

```
void g_isosurface_f_3D(
    double x0, double x1,
    double y0, double y1,
    double z0, double z1,
    int number_x, int number_y, int number_z,
    double *u,
    double height);
```

x,y,z ; 描画範囲の指定

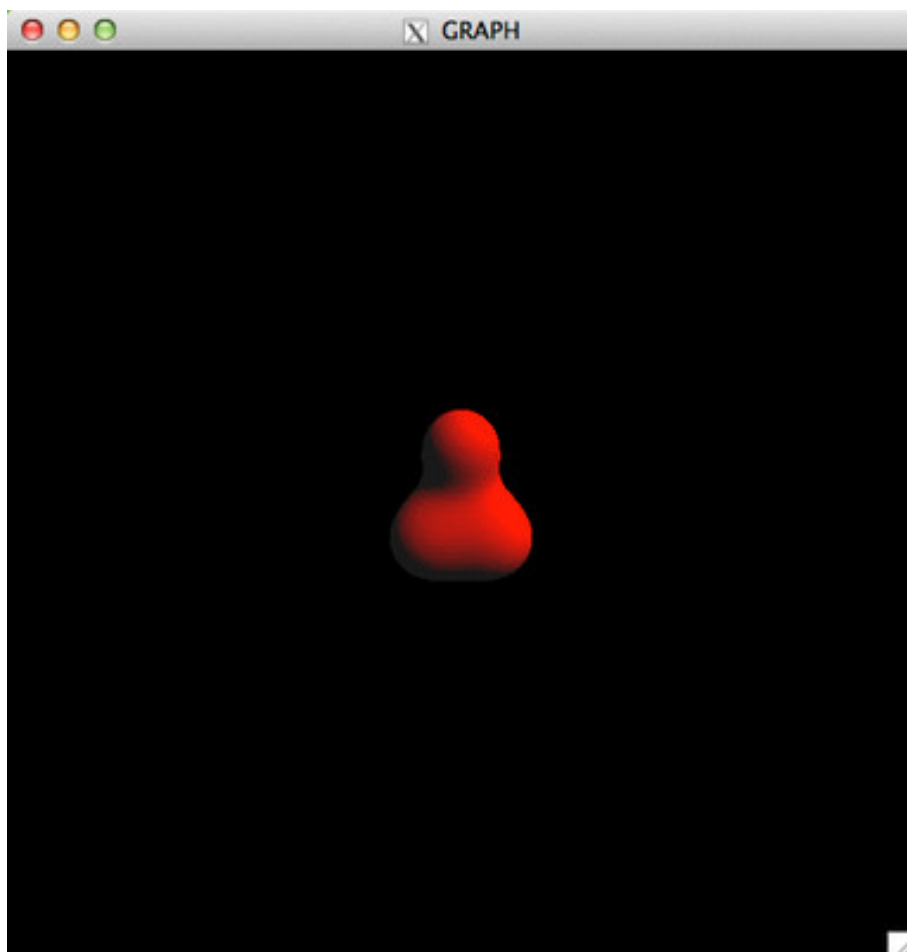
number ; 配列 u の各方向のサイズ

u ; 1次元配列を 3次元配列化\*した配列

height ; 等値面を描きたい値

g\_isosurface\_f\_3D 関数の説明

1次元配列 u に対して与えられた高さ height の位置でマーチングテトラヘドン法を用いて、等値面を描画する。(フラットシェーディングのみサポートしている。フラットシェーディングはメモリ使用量が増大するため機能しない。3次元配列化\*に関しては前章をお読みください。)



## 6 Version の履歴

2016 5.12 Ver 2.2.1

- `G_Font_id`, `G_WIRE`, `G_FILL`, `G_BOOL` を `define` において直接数値を与えるように変更した.  
(岡本, 秋山)

2016 4.26 Ver 2.2

- `g_text` 系関数を刷新.
- static ライブラリ (\*.a) と shared ライブラリ (mac なら \*.dylib, Linux なら \*.so) を同時に生成するように変更

2016 4.14 Ver 2.1.1.1

- `g_fan_2D` のバグを修正

2015 4.15 Ver 2.1.1

- `g_data_plot`, `g_isosurface`, `g_bird_view` のバグを修正

2015 4.13 Ver 2.1

- オフスクリーンレンダリングを実装
- Manual を更新 (岡本)

2014 12.4 Ver 2.0 (全員)

- ほとんどすべての関数の実装を見直した.
- 遠距離並び替え型透明化処理を正式にサポート
- Manual を更新

2014 10.16 Ver 1.13

- Manual を更新 (秋山)

2014 10.16 Ver 1.13-experimental

- Manual を更新
- 視点位置の内部的な計算方法を改善
- gluPerspective の引数 (fovy, z\_near, z\_far) を変更 (平芳)

2014 10.14 Ver 1.12

- Ver1.12-experimental の変更点を採用
- manual の付録を Tex に書き換え (未完成)
- 後方互換性がないので注意してください (平芳)

2014 10.3 Ver 1.12-experimental

- 3D 版と 2D 版で同じ機能を提供する関数を統一
- 3D 版しか存在しない関数から 3D 表示を削除

破壊的な変更のため、experimental で評価を待ちます (岡本)

2014 10.3 Ver 1.11 C++ 対応、及び gcc 対策のための雑多な修正

- g\_init\_3D g\_init\_3D\_core の char\* 型引数を const char \* 型に
- 変数長配列が c++ 利用時には削除されるように

その他の修正

- G\_INPUT 構造体を削除
- マニュアルの g\_init\_3D\_core を修正 (岡本)

2014 9.16 Ver 1.10 g\_bird\_view を改良 (malloc を使わないプログラムに改変)

g\_rectangle\_3D の法線ベクトルの向きを修正 (平芳)

2014 9.8 Ver 1.09 g\_text\_standard の追加

マニュアル (付録) の更新 (平芳)

2014 9.4 Ver 1.08 g\_def\_scale\_3D\_core の追加 (画面上方向の指定を可能に)

font のデフォルト値を設定

マニュアル (付録) の更新 (平芳)

2014 8.13 Ver 1.07 g\_init\_3D, g\_init\_3D\_core の引数の win\_pos,width,height を double 型から int 型に変更

g\_bird\_view\_f\_3D, g\_contln\_f\_3D, g\_data\_plot\_f\_3D を作成し, test\_program に使用例を追記

マニュアル (付録) の更新 (平芳)

2014 8.11 Ver 1.06

g\_input.c を正式に追加. ASCII 文字に加えて, ファンクションキー, 矢印キーなどの特殊キーを入力可能.

マウス入力に対応. 最後にクリックされたポイントを入手可能.

G\_INPUT\_STATE g\_input\_state(G\_KEY\_CODE code, int \*x, int \*y) 入力データの取得  
詳しくはマニュアルで (岡本)

test\_program に g\_input\_state の使用方法を追記 (平芳)

2014 7.28 Ver 1.05-experimental

g\_input.c を仮追加. ASCII 文字を入力出来るように.

void g\_input\_init() 入力機構の初期化

G\_INPUT g\_get\_input() 入力データの取得

G\_INPUT\_STATE g\_input\_state(G\_INPUT in,unsigned char key) key に対応するキーの情報を取得. G\_INPUT\_STATE 列挙体の詳細は g\_input.h で

Sample\_g\_input を追加. 上記の分のサンプルコード.

g\_text\_3D/2D\_virtual を変更. printf 形式でのフォーマットを使えるように.

glsc3d.h に M\_PI の定義を追加. M\_PI が定義されていない環境 (CentOS とか) に対応するように.

尚, long double の精度が環境依存なので, 四倍精度にも対応できるように 36 桁定義.

experimental 取れたらマニュアル更新します. (岡本)



2014 6.27 Ver 1.04 g\_init\_light\_3D\_core の追加.  
TestProgram を変更.  
マニュアルを更新. (平芳)

2014 6.27 Ver 1.03 g\_cls\_3D 内の glutMainLoopEvent を g\_finish\_3D に移動.  
g\_scr\_color\_3D の引数から不透明度 (a) を削除.  
g\_init\_3D\_core で背景色を変更可能にした.  
上に伴い, TestProgram と SampleProgram を変更.  
g\_rectangle\_3D の direction のバグを修正.  
g\_contln\_2D の線が途切れる問題を修正.  
マニュアルの更新. (平芳)

2014 6.27 Ver 1.02 g\_isosurface\_f\_3D を作成した. TestProgram も作成した. マニュアルへは記載していない. (秋山)

2014 6.24 Ver 1.01 TesProgram に RunAllSample スクリプトを追加. glsc3d.h を c++ にも対応可能にした. (秋山)

2014 6.22 Ver 1.0 マニュアルを更新 (平芳)

2014.6.x GLSC3D version 1.0 完成

## 7 おわりに

GLSC3D は gnuplot ような便利さも無ければ、OpenGL のように 3D オブジェクトに対して、詳細な属性設定をすることもできません。しかしながら、その分コーディングが簡素となり、あなたが思い描くことは何でも表現できます。本マニュアルを熟読し、サンプルプログラムを参考にしながら使用してください。

新関数やライトの上限を増やしてほしいなどの要望、またはバグを発見した場合は秋山正和<sup>\*31</sup>までご連絡ください。

論文や学術研究会などでも本ライブラリを使用された際は、その旨を記載してください。開発の励みとなります。

本ライブラリを改変し、再配布することは禁止しません。しかしながら、その場合には私へメールでご報告ください。また使用者から私へ改善要求や不満などが来ることが無いように配慮していただければ幸いです。また科学技術のさらなる発展のために作成したライブラリですので、有料化などの行為はおやめください。

---

<sup>\*31</sup> akiyama@es.hokudai.ac.jp ですが、未来永劫このメールアドレスが使用可能かは不明です...

## 8 作者の覚書

### 8.1 新関数の追加方法

- 新関数を作る際は、Src のプログラムをよく見て他に倣って作成すること。
- 作成したプログラムが正常に動作するかを確認するために、TestProgram フォルダにて関数のテストプログラムを作成すること。

### 8.2 Manual の作成方法

- Manual フォルダに隠しフォルダがあるので、そのフォルダ内を見ること。
- Canvas.key には絵が沢山あるのでそれをみること。
- Figures には eps ファイルがあるが、そのファイルは jpg2epsconverter をうまく使えば楽に作成できる。

### 8.3 設計上の基本原則

GLSC3D の関数は、大きく分けて二つの関数が存在します。常用関数とコア関数です。コア関数は大量の引数を要求する代わりに、ユーザーにより高度な選択肢を提供します。例えば描画関数多くは、ユーザーはコア関数を用いることで、描画の質と実行速度のトレードオフに関与することが出来ます。常用関数は逆に、一般的でないと思われる選択肢を隠蔽することで、より使いやすいよう、関数の引数を最小限に留めています。

現在、常用関数はコア関数のアダプタにすぎません。内部では適切なパラメータをしてコア関数を呼び出しています。つまり、同等な引数を設定する場合、性能的な差はほとんどありません。関数呼び出しが増える分、理論的には常用関数の方が僅かに劣った性能を持つと考えられます。

今後の更新においても、一つの例外を除いてこの構造は継承されるべきでしょう。一つの例外とは、実装言語が C 言語から、関数オーバーロードや引数のデフォルト値などの機能を備えたより先進的な言語に切り替えられた場合です。この場合、引数の多寡によって関数名を切り替える必要はありません。

しかしながら、その場合にも、C 言語から呼び出し可能な構造は維持すべきです。なぜなら、ユーザーは数値計算の専門教育を受けていることが想定されますが、プログラミング全般に対してはそうではありません。また、現在、数値計算の教育では C 言語の使用を前提としていることが多いと考えられます（あるいは FORTRAN!）。また、C 言語は内部的にも比較的単純な構造を持つため、他の言語からも比較的容易に呼び出すことが出来ます。即ち、C 言語から呼び出し可能な構造を維持することで、他の多くの言語からも呼び出し可能となります。

## 8.4 ファイル構成

git を用いて最新版を入手することが出来ます。ただし、サーバーは動的数値モデリング研究室内にしか公開されていません。

開発版は LatestVer です。これは開発のため不安定になり得ます。最新の安定版は GLSC3DVerXXXX で、XXXX が最も大きいものです。これは安定して使用することができます。

ソースコードは Src/Source にあります。インクルードファイルは Src/Include です。Src で make を行うと、Src/Object にオブジェクトファイル、Src/Depend に依存関係ファイルが生成され、最終的に Out に公開用のファイルが生成されます。通常、Src/Source にファイルを追加しても Makefile を書き換える必要はありません。

ユーザーは Src で make した後、Out 以下のファイルを適切な位置にコピーする必要があります。これを自動化するスクリプトは現在存在しません。

TestProgram 以下に各種サンプルコード、SampleProgram 以下にデモプログラムが存在します。開発者は新たな関数を公開する場合、対応したサンプルコードを追加して下さい。

Manual 以下にはマニュアルが存在します。あなたが読んでいるこのマニュアルは、おそらく Manual/GLSC3D\_Manual.pdf でしょう。開発者は、Manual/.TexManual 以下を見て下さい。新たな関数を公開する場合、GLSC3D\_Manual.tex にその関数の情報を追加してください。書式等はすでにある関数のものをテンプレートにして下さい。画像は Figure/eps 内に追加して下さい。

## 8.5 描画処理

GLSC3D はある程度の透明化処理をサポートしています。このため、全ての三角形描画は一旦保持され、最終的に視点から重心までの距離を用いてソートされます。このため、今後追加される描画関数は全て、このプロトコルに従うべきです。即ち、

1. G\_POSITION 構造体、及び G\_COLOR 構造体か G\_MATERIAL 構造体から G\_VERTEX 構造体を生成
2. G\_VERTEX 構造体から G\_TRIANGLE 構造体を生成
3. G\_TRIANGLE 構造体を g\_set\_triangle 関数を用いて登録

この手順は g\_triangle\_3D 関数か、そのコア関数を用いて代用しても構いません。